



334
98

思

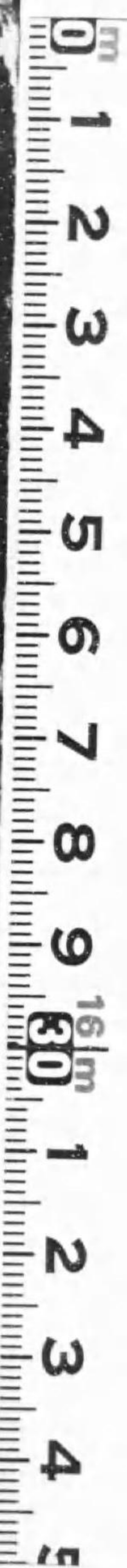
女

色

綺

談

T. TERAO 著



始



特220
140



テラオ、大観・著

色

綺

歌



白鳳社出版

須藤鐘一著 性に目さめる頃 新刊 定價金一圓廿錢 送料

カルミアトン著
石橋董譯

處女なき國 十八版 定價金一圓廿錢 送料

……この偉軀に秘むる綺談の数々よ!!



著者が現在の自店スタンドに於ける勤務姿……

T・T・E・R・A・O……



.....礼 疲

ロンドンの女の一人……



.....
一と夜を踊り明す

ドイツの女.....



王女チャの雞野の海上

斷然尖端を行く

序

エロ出版物の洪水といふことを、屢々耳にはしますが、私は、この聲は神經衰弱的な人々のいふことと思つてゐます。

といふのは、出版物のエロ・グロよりも、この世の中のエロ・グロさ、アブノーマルさはいつたいどうだといひたいのです。

しかも更に、この日本を離れた海外諸國の、そのまたエロ・グロ振つたらどうです斯ういふ四圍の情勢の下に於いて、出版界だけが、心弱々しくもやつと今日の程度に迄出版物を世に送つたのは、多い處か頗る貧弱なものだと、私は思つてゐますそこでですよ。私がこのカウンターの陰から起つて、天晴れ一番、日本エロとナセンス文献の王座をと狙つた譯です。

世界女色綺談！ それ故この本が決して、エロ出版流行の驥尾に附してたゞ飛び

出したといふのでないことは、先づ解つて頂けることと思ふ。

もつと生れていゝ筈です。どんな意味（社會政策上から、社會風教上から、婦人問題上から、性慾問題上から、それ／＼）からもそれは云へることです。もつと盛んに大先輩がそのエロ・グロの蘊蓄を大いに公開されてよい筈です。それを促す爲にも私はこの本を世に送るのです。

ところで、どうも馴れたスタンドの呼吸とは聊か異つて、かう開き直つて序文となると頗る具合が良くないです。でこれはもう止めます。

一切は、どうか本書によつて知つていただき度いと申してをきます。

本書出版に當つて白鳳社主の後援と、蒼友山六郎兄の援助とを感謝してをきます。

昭和五年師走

神田神保町救世軍本營の向側
素人おでんみさゝの暖簾の陰から

テ
ラ
オ
生

世界女色綺談 目次

異邦人の幕開き……………一

仄闇に見る黒女の裸體……………七

ホテル稼ぎを嫌ふ女……………二七

ホテルに棲む美人……………三七

懇切に媒介する黒女の情……………四七

それを内職とする婦人の稼ぎ場……………五七

キャバレーの女色……………七一

性慾の洗濯人……………八一

「税關」を伴れ歩く……………八九

ハイドパークの垣間見……………九九

ロンドンの女の二種……………一〇五

女同性愛の家……………一三三

獨逸女の呼び方……………一三二

ビクトリア日本人居留地……………一三七

素人女で繁昌する家……………一四五

ハンブルクの酔と女……………一五一

二千年の昔を今に活す……………一六一

水にうつらふ影……………一六九

ピヤ・サン・ビエトロの響き……………一七七

世界の巴里に公娼訪へば……………一八五

モンマルトル情痴の饗宴……………一九五

世界女色綺談

寺尾大観著

見る物と覗く物……………四

東洋の樂園……………三三

野雞と歡樂境……………三五

異邦人の幕開き

ブン ボアン ブン ボアーン……ブン ブン ボアン ボアーン……
銅羅が響く。

これが、丁度芝居ならばきつかけの二丁がはいつたと同じだ。續いて浮き立つやうなしやぎりが下座から湧き上ると、引幕が……御存じより、丈へ、の幕が手繰られるのだ。幕が開くのだ……詰り、おゝこの懐しの祖國よ、から離れて、わざわざ御苦勞様にも、知らぬ他國に異邦人たるの幕が開くのだ。

甲板上は、宛然、銀座の縮圖だ、いや、伊勢佐木町だ、それとも新宿だ、道頓堀だ、右往左往だ！

然し、慌てちゃ不可ない諸君。どんなに別れが辛く、見送りが忙しくめんどうくさく馬鹿らしく、見送られが飽氣なく嬉し悲しくても、その銀座の伊勢佐木町の新宿の道頓堀が見本市を開いた太洋丸の甲板上、出航實際のごつた返す折であらうとも、よく眺めるのです。

何アに陸をなんぞ見るんぢやない。氣をつけて！ 氣をつけて！ B甲板のその

横、A甲板の廊下への曲り角を、等々々。

まあ何といふ素晴らしい光景が其處に此處に、一九三一年型紳士淑女諸子によつて、如何に、サムノ藝術を侵し宮武のスピードを超え映畫檢閱官の官能を以て、狙ひ正しく素早く無駄なく目的だけを、ちやくく遂げられてゐるかを發見されよう。

慌てちゃ不可い！ 冗談ではありません。

見送人と被見送人との間にそんなことがあるんなら、めんどくさい何も遙々異國迄、私なんぞが女色調べになんぞ行くものですか、この儘直ぐ下船、洋行中止だ。

じつくり、落着いて私の語を聞いてほしい。よろしいか！

この親愛なる友誼に満ちたる我が見送人達は、物好きにも洋行せんとする我々を好餌として、或は焼き豚位いに心得て、これ幸とその機會を巧にも利用したのであります。

そこで、銅羅が鳴る、銅羅が鳴るのです。

ブン ボアン ブン ボアーン……と鳴るのです。

地下鐵サムの宮武投手の立花高四郎氏の、それらの才能を併せ有つた多能多才なる紳士淑女は、即ち見送の紳士淑女はです、忽ちバートナーを得て、嬉々として舷側を上屋へ下つて行くのです。新歸朝者の如うな晴ケ間敷い心地で降りて行くのです。無論被見送人の事等はもうどうでもよろしいのです。詰り紙テープが切れる迄を辛抱してくれるだけです。

ブン ポアーン ブン……もう銅鑼も鳴り切つちやいましたつて？ さうですかそれちや出航だ！

お、日本よ……何て、そんな量見は起る道理がない。だつて、眼前の棧橋上には何がはじまつてゐますか。

そこで、洋行せんとする者の眼には、即ち我が眼にも泪が浮ぶかも知れません。何が悲しいかつて、そんなことは云へません。そんなことは云へた義理ちやありません。ただ、斷然仲の好い見送人達を眺めて悲しくなつてくるのです。さうなんです！ 斷然悲しくなるのです。

『御無事で……』

『御壯健でねえ』

『おい、しつかりやつてこいよ』

『手紙をふんだんにくれよ』

『お音信を、ね！』

『……さアあ……』

『……さアい……』

『バツ……さアあ……』

ほろり、頬を涙が傳います。

笑つちや不可ない。

悲しくもなります。人を馬鹿にして散々人をだしにつかつて、奴等歸りはいづれ何處かへ、何處かで、何うかするんだらう。思ふなと云はれたつて思はざるを得ないその光景を、遠ざかり行く我が舷から眺めてゐるとき、悲しくならざるを得ない

ではないか。

洋行する者は泣く、そんなことは泣かした奴が一番先に口にする言葉だ。この勇敢なる異邦人希望者がなかつたなら、紳士淑女はまた新しき機会を、そのランデブーの爲に何處にか發見せねばならなかつたであらうことを思ふ時、誰か、發見の勞苦を、コロンプスの血と汗を、誰かこの紳士淑女に強要なし得ようだ。

そこで、目的は、よしやどうあらうとも、私はこれらの紳士淑女群の爲めにも、敢然として洋行したのである。せねばならなかつたのである。

斯くて、新異邦人たるべく太平洋を渡る船に思に沈み、幾日かを送り迎える私の胸中を果して誰が知らうぞ。

かくて、洋行を人がしたがる理由が知れる。詰り人によるこばれたいのですね。處で、私には大なる事業がある。私は船室のベットひそかに、新しき猿股の紐を檢して、ハワイ來れと待構えて武者戦ひしたものである。

仄闇に見る黒女の裸體

けた、ましい汽笛の音に夢破られて床を蹴り起き出で見ると……そんなことは出鱈目だ。

二日も前から待ち草疲れたハワイだもの。

汽笛の音なんざあ後方の方に聞き流した、夢は上陸してからのことだ。

魂も空！やはり日本人は巧いことを云ふものだわい、と、正直こゝで異邦人らしくお國をちよつぱり思ひ出してみたものだ。が、そんな女々しい根性は忽ち常ばきのツボン下と共にトランクの底へ納ひ込んだものだ。

そして上陸々々。

何といふ素敵な天地だ。やし、びんろう樹、コ、ナツ、の繁み……うふ……、常春の國ですね。處で、ハワイから砂糖と果實が栽培されて大變な年産額に及んでゐて、各國人が入り込んでゐて、ホノル、市の背後にポンチボル死火山の丘があつて、などいふことは一切合財ツウリストビュロー邊りの案内記に任して了つて、私は今や自動車上に血眼である。

いやに眞ツ平な自動車道を、車は素ツ飛んでゐる。何處へ？行くんか私自身にも判り兼ねるのだから心細い。

だが、諸君は安心して可なりだ。茲に私は唯一の私の旅行案内記を持つてゐる。その頁を私は靜に繰つてみる。

「此處には又ニグロの女が居る。ハワイの土人の女も居る。其他フランス人、スペイン其他各國の女が居る。これ等の女の居る所は町の郊外つゞきで、少し淋しい所である。が、しかし電車の通る所もある。一評構への家でぼつ／＼散在してゐる。造りは文化式で小さい平家が多い。此處へ行くには多少の危険性はあつても、自動車の運轉手に案内させるといふ。警察が喧しいから皆秘密になつてゐるので、住居なども一つ所にかたまつてゐるのでは無い」とこれが「歐米女見物」のある頁だ。

これなんめり笑。

「おい、美人のゐる家へ案内してくれ」

「何ですか、紳士。」

運転手の野郎め、背映鏡を上眼に視て、やに澄し込んで紳士と呼びかけてゐる。だがその眼には慥に卑しい笑が覗いてゐる。私はぐつとそり返つたものだ。

『美人の家へ案内してくれといふんだ。』

『は？ 美人の家！』で、運転手の左足がぐつとブイーキのペダルを踏んだのを、私はちゃんと知つてゐた。

『何國人の處ですか……やはり紳士もニグロの家へ行かれますか。』

『ニグロ？』

全く速度の落ちた車は、私の返詞一つで、今直ぐ右へでも左へでも其處等を廻り込みさうな氣配である。

『……………』運転手は露骨に私の方を振向いて笑ひかけてゐる。

『ニグロの處へやれ。』とう／＼私は詮方なくさう云つて了つた。だか諸君、私をどうかそれ程の剛者と思はないでほしいものです。正直、この時には、私の案内記「歐米女見物」には、この人種別の家の事が書いてなかつたので、ついうっかりし

てゐた處に乘じられて了つたのだから。

斯では果しと氣を取り直し、私はがつちりと構えた。さあ来い、ニグロ何者ぞと全身の氣力を臍下に落着け……臍下！ どうも文字といふ奴は妙にエロですな。

『紳士、家の前までやりますか。それとも此處でお降りになりますか……………』

『う、うむ……………』

窓外には誠に静な郊外の文化住宅地域らしい光景が展げてゐる。

『へゝえ、こゝがかね』とこれは日本語で私は洩したものだ。

『あの三つ目の家です、紳士』

『うん、可し ストップ！』

だが、よく氣がつくと、車はとづくに停止つてゐるんだから確なものだ。

サキユーと云ふ掠れるやうな聲を後にして、さて私は女色調べの第一步を印したのである。

思つても見て呉れ給へ諸君。

時は一九三〇年である。所は……そんな肥料臭い新宿や銀座とは異ふのである。太平洋に浮ぶエデン、常春の園ハワイであるんですぞ。この歴史的なる第一歩を踏んだ私の心は如何に男々しき愉快さに緊張戦慄したことであらうぞ。將に旅順攻防休戦條約締結に臨む彼のステツセル將軍の心胸にも似、春季大掃除に年一度を限り埃堆き棚上の物を取下ろす且那様の如き心境にあつたであらう。眞に悲壯とも云ひつべき境地にこそあつたのである。

私は嚴肅な氣分を以つてベルを押した。

聞こえる、近寄る蹀音が扉越しにはつきり迫つて來た。

『やあ！今日は』

『……………』

三十四五の細い眼の光つた女が、笑顔を忘れた如うな顔をして私を視てゐる。

『時に……………』何が時になのだ知らんが、出て了つたのだ。實に變だが己むを得ない『その、美人が居ますか』

『お入りなさい』

恐ろしく厳しい感じだ。宛然、子宮搔破手術室參觀の體だ。

通されたのは日本の六疊位の大きさの室だ。室内の調度にも別に何のこの家らしい異色もない。剃き取りのカレンダーが白々しく壁にかゝつてゐるのも、妙に事務的だ。

前の女、女監守の如うなのが再び入つて來た。と、こんどは斷然笑ひやがるですな。そして、びつたりと私の側へ腰を掛けたものだ。

『君が、私……………客の相手なのかい』なアんば何でも世の中に、これほど馬鹿氣たことがある筈はない。

『いゝえ、今直ぐ美人が來ます……………ですけどね、私でよろしければ私悦んで貴郎に私の全部を捧げますわ』

云ひ廻しこそ全部だの悦んでのだが、この際この機に於ける私の感たるや、哀れなものだつた。巫女の如うな、膿盆の如うな女と談るべく、敢て異邦人たらんと

したものでなかつた筈だ。で、私は嬉然としてこの相手の申出を拒んだ。

『いや、今直ぐ来るであらう處の、その婦人を待つことに私は幸福を感じる者である』

これは直譯體に直したのだが、本當はこれを逆も巧い二度と云へぬ英語で流暢にやつたものだ。

すると女はさつと立上つた。そして元の笑のない顔に復つた。神の移つた巫女、空の膿盆、一陳の風に吹き拂はれた煙草の煙みだ。

『小し待つてなさい、ね』

それで、さつさと女は出て行つて了つた。だが出て行つて了ふ時の颯爽たる女の態度から推して、よくも無事に手放されたものと、私は自分を顧見てやれ〜と安心したものだ。まだ〜洋の東西を歩かねばならぬ身に、さりとて氣の強からぬ話だ。

待つこと暫し、ぱつと扉が蹴……でなかつたかもしらぬが、勢よく撥ね排いた。

『ふあア……』

待つた諸君、これは私の上げた聲だ。何故と云つて、開いた扉から出た女が眞ッ黒であり過ぎたのと、たゞ一枚のシユミーズが餘り白過ぎたのに、何といふ唇の赤さだつたらうか。大きな練炭が水爪の小切れをくわえて白い三徳に乗つて來たのだ『紳士、そんなに嬉しいの？ だつて、私ね、今お化粧してたんだもの……だけれどほんのすこし待たただけでせう。それにそんなに待ち草疲れて嬉しがるのは、かわい〜ね、貴君はかわい〜のね、私、たくさん愛してあげるから……』

諸君、民族を異にすると斯も甚しき誤解の生ずるものであらうか……如何なればこそ、私の悲鳴が、彼女には歡聲と翻譯されたのであらうか。茲に到つては遂に嘆かざるを得るのである。更に私を悲しましむる不可解事は、彼女煮黒女のお化粧せしといふ一事に對してである。嗚呼、私は遂に既にして我事業の至難なる事を痛感したのであります。

『何をぼろとしてるの紳士、さあ契約を取決めませう』

と、煮黒女の腕が私の頸に廻つた刹那、はつとして私は前面の鏡に我が襟邊のカラーの色を視遣つた。だつて、どうしても白いカラーの黒く染らない筈がないと思へたのだつた。

『そこで、何歳だね』どうも私の話術は餘り上手くないらしい。突然云ふ話にそこでいもなかつたのである。

『十九歳よ……ね紳士、七弗拂つて頂戴よ。ね』

『オーケー』

で、私は二弗高いと思ひ乍ら、でも我慢して七弗の金を女に渡した。値切りなぞするものですか……斯る場合通例な日本男子の氣前好さを見せてさ。

『此方へ被居い』

と女は靴下の内へ金を入れると直ぐ先に立つて私を導いたのが、次の室だ。

挟い室だ。窓にはカーテンの色が赤く、床にはダブルベット一臺とベットテエブル一脚しかない。その仄暗い室に黒い肢體が動いてゐるのだ。勿……とつくに何

時の間にやらシユミーズも脱いぢやつてゐる。いや、本當に氣のつかぬ間に脱いでゐたのだから残念乍ら仕方がない。

『紳士は何國？土耳其？……黒西哥』

と兩腕兩足で巻きつき乍ら私に問ふたのである。そこで、諸君に斷つてをくが、私は決して色の黒い日本人ではない。寧ろ色の白い方の日本人であるが、それが、ニグロ婦人から斯う問はれたのである。諸君、私と共に歎いて呉れ給へ。

『紳士は健康ですか』

『え？』

これは突然だつただけに驚いた。が考へてみると、これが即ち病氣はないかの問の裏だ。釋然として私は答へた。

『素晴らしい健康だ。太平洋持ち越の健康だ！』

『嬉しい！』

『だが、君は大丈夫かい？』

私は反問してやつた。

『検査して下さい』

と云ふなり女は私の首ツ玉から手を離すと、ベットの土へ仰向いて横臥した。とつとと、こゝで私は頭を働かせなくちやならぬ。何故と云つて、これから先を書く、折角のこの調べが世に出ることができずに没収されて了はねばならぬ。詰り働く頭のおつたが爲に、諸君にこの先を語り兼る譯だ。働く頭を恨んで呉れ給へ。我乍ら私の賢明さに感服しますね。

そして、ベットに腰かけて私は女を膝に抱き上げて問ふたものだ。

『警察は喧しいか』

『とつても厳しいの……でも、今頃は大丈夫よ。』

『見つかることはないか』

『いゝえ巡査にはちやんと、それだけの事がしてあるかよろしいの……だけどそれがまた大變でね』

『一晩位い泊めてやるのかい』

『いゝえ……そんなこと誰がするもんですか……たゞ、酒代をやるんですよ。だから逆も金が必要なのよ。だから、貴郎もまた来て下さいね。』

『うゝ、来るよ』

『貴郎は何處に住んでゐる？』

『私はワイキ、にゐる』海水浴場で有名な處だが、相憎私はホノル、とワイキ、しかハワイの地名は知らないで、何の躊躇もなくこの取つてをきを出した。立派な異國人振だ。

『こんど何日被居るの？』

この語で尻を上げなきやならんことは洋行する程の紳士が心得てゐぬ筈はない。劣らぬ紳士道を踏む私である、すつくと腰を上げた。が、その前に女はちやんと側へ下ろしたと云ふ迄もない。そでないと逆も重い女だから、私は女を床に落して了つただらうと思ふ。よしや壞れ物でないにせよ、この場合私が斯うしたことを、

私は今も猶、やはり私の頭の良さに基くものと、内心窃に誇として居る。

再び私は車上の人となつた。

『紳士、何處へ行きますか、』

運転手はレバーをローへ入れて、徐行させてゐる。

『面白い處がいゝのだが……』

『紳士は日本人の藝者はお好きでないですか』

『藝者？』

これは不可ない。日本人が海外へ出て、通例日本人の藝者を見せられても迎も遊ぶ勇氣等の出るものでない。理窟はどうつかうとも、それが事實なのだ。加之私は異國振をこそ見ようとする者なのだから、云ふまでもなく尻込みをした。

『いや日本人は駄目だ。それより何處か他國人の面白い處へ案内してくれぬか』

『かしこまりました』

と、運転手はレバーを斷然トツプへ送つた。車は物凄く走り出した。結局、この

フルで走ることとも車代に影響があるのだ。

それでもまだ私の心は先走りして、どんな家へ案内されるかとそれを待望してゐる。何しろ先を急ぐ旅だからこれが當然ですさ。

車は突然、速度を落して電車通りを右へ折れると、びたりと停止つた。

『もう來たのか』

『はい、やつと参りました。』

癢な返詞をされても氣にならぬ程、兎に角私は忙しく降りると、車代を拂つて、またしても教へられた家の前に立つた。

今度は既に第二回目である。云はゞ場馴れた武者振である。思へば私の歴史的事蹟も幸運に進むことである。諸君よ、どうか私の爲に更に幸多かれと祈て呉れ給へ
『……………』

脂切た三十近い女が扉を開けて顔を出したが、恐しく難かしい表情で黙つてゐる。先刻は笑のない女、これは言葉を忘れた女、歌を忘れたかなりやでないので、こ

いつは歌にならぬ。

『おそろしく難かしい顔をするが、どういふ譯なのだね？』

私も正直だモウどうでもいゝと思つて、頭から訊ねてやつた。

『駄目なら歸るよ』

吝な話乍ら——全く私は氣前の好い人間であるのに、この時はふと私にもなく吝なこと乍ら金が惜くなつたのだつた。この氣前の悪くないといふことの實證をする爲に、私は諸君に私の平素を告げてをかう。

先づ私は市電のロハ乗りをしたことがない。洗湯へ料金を出さずに入つたこともない。規頂面なもので然も氣前の好い者だ。更に、私は自分が散髪をして、それを隣席の他人に拂はせよう等と吝な考を起したことなどは曾て一度もない。況んや、飲み食ひ遊びの金を例へ十錢たりとも値切り惜しんだことなどはない私である。

そこで、この駄目なら歸るの一語が出たのだが、これが誠に利目があつたらしく、女は忽ち驚いて私の袖を捉えた。

『いゝえ、どうぞ御入り下さい。ぜひ』

と急に多辯になつて笑顔さへも見せる。

で、私もはいつて行つた。

室は割に廣い部屋で、ソファアに商賣女らしいのが二人。何かぼんやりとしてゐたが、私の姿を見ると急に活氣ついた。

『いらつしやい紳士』

『よくいらしやいましたね、貴君ならいゝんですよ』

『何かあつたのかい？』

私は何があつたのか、事と次第では歸る口實にならうかと内々訊ねてみた。

『今ね悪魔が來て歸つた處です』

『だから、こんどは貴郎が福の神でせう』

と盛んに媚はじめた。却々美しい白人だが、慥に私は先刻のある煮黒女でもう斯ういふ女への感興が麻痺したらしい。

『ほう巡查が来たのかい……それは不可ない』

『どうして？ でも、もう歸つたのだからいゝんですよ、紳士』

『いや私はどうもさういふ後の氣分が嫌な性分だね……だから今日は駄目だよ』

『あら……それは詰らない』

『それぢや、あんなこと聞かすんでなかつたのに』

『ぢや、また次に來て下さい、ね』

『あゝ來るよ、こんだあ金曜日』

『本當？』

『嘘は云はないよ紳士だもの』

『さう、嬉しい、それぢや待つてゐます』

送り出された私は誠にぼかんとした氣持だつた。が流石英勇の私も何か疲れを感じてゐる。

そこで、諸君、ハワイは成程好い處であります。常春の國でしたつけ、その通り

だつたことを申上げてをきますよ。

我等が偉業はこれからだ。ね諸君、では、そろく船へ戻りますか。

ホテル稼かせぎを嫌きらふ女おんな

私は意外な事に遭遇して了つた。

實は私は素晴らしい酒好きである。それ故にこそ始めた現在の商賣である。

處が米國はドライの土地、禁酒法施行の國であることだ。これには正直泣かざるを得なかつた。だが、泣いてほろ酔いになれる道理は、唐であらうと降るアメリカであらうと日本帝國であらうとある筈がない。

で私の受難が始まるのだ。アメリカをさよならする迄は、私は酒の受難と女の受難とに終始したことになる。後の受難は覺悟の上とはいへ、前の受難に泣きたくなる。

そこで、船が着いたのですよ。變でも仕方がない、ハワイからシスコへね。桑港へ。金門灣へ、女の國女の港、といふ感じのするシスコですよ。

處が、それが更に女について面白い發見が出来ないので、これ程馬鹿氣たことはありません。

で、私は私の用件を切り上げて出向いたのが、シヤトルです。開き直つて北米シヤトルと云はねばピンと來ないそのシヤトルです。

もう既に異邦人も板について、堂々たるものだ。だが苦勞は日増しに加はるばかり、どうも瘦せるといふ氣がする。瘦せるも無理はない、酒を賣るのは藥屋（ドラッグ・ストア）だから、では嘶の如うな話である。

虎兒を得るべく、何處に虎穴があるのやら判らぬでは、折角の廿二貫の剽悍も揮ふべき場所がない譯だ。

だが私は頭がよく働く——既に諸君は御承知の通りだ。

そこで、ある日である。これは西曆年月日を抜きにしよう。それ程諸君の前に誇る本來の發見ではない、たゞ乾き（ドライ）を（ウェット）濡すことに過ぎないのだから。

で、移民でない私は威張つて呼んだものだ。

『おい、ボーイ、どうだ酒を買つて呉れないか。』

『酒………ですか？』

とボーイは、ドライに失敗したフーズアの如うな表情をする。

『さう、私は見る通りの酒の好きの人間だが、どうも、この薬がないと復て了ふのだが。何とかして手に入れてくれないか』

『高いのを御承知なら、何とかします。』

やつと虎穴が此處に發見つたのだ。私の勇氣は猛然と振ひ立つた。

『幾何だ？』

『ポケット用のキスキーで十弗です。』

『十弗？』日本の停車場で賣つてゐるポケット罎は一圓そこ／＼でしたな『よろしいそれを一つ手に入れて呉れぬか』

『畏りました。』と不動の姿勢でおじぎをして出て行つた。

流石は紳士國である、法を犯す行爲にも禮儀を失はぬ。この調子でリンチをやるのだらうと、正義の士が云ふさうであるさうだ。

で手元に届いた酒を私は、マルクスが初めてマンチエスター圖書館にて讀書に耽つた如くに『貧るが如く』飲み耽つたのである。ポケット罎をね。大鯨の百川を吸

ふが如くにね。勃然と起つた勇氣が何を私にさせたか？それは次の通りだ。

『處でボーイ君、美人はないか』早速君と御禮心だ。

『はあ？』

呼びつけられたボーイは、壁頭のこの言葉に先づ驚いてゐる。だが、彼もコロンブスに發見されたアメリカ生れの人間だ。どうしても發見する人に縁がある。直ぐ言葉を繼いだ。

『どうも、ホテルへは容易に來ませんが……………』

『ホテルへ來ない？何故だ』

『警察が喧しいのです、はい、紳士！』

『だが、それならどうして彼女達は喰べてゐるのだい？』

『は？』

ボーイは、まるでワシントンの糞を鼻先へ突き出された如くに驚いてゐる。

『呼びや來るんだらう！』

『そりや 来ますが酷く高くつくものでして、どうも……それに支配人も迎も
嚴重で、却々内部へは這入れませんが。』

『そんなことあないだらう……ね、おい』

そこで私は、氣前の好い人間だつたことは諸君に告げてある。そこで私は、氣前
好く……この文字に榮光あれ……ポイーにチツプを握らせたものだ。チツ
プをね。

『おい、何とか世話してくれよ、ね、私は部家に居るから、ひよつとしたら、今の
ウエットに酔つたので眠つてるかもしれないが、したら構はず開けてはいつてくれ
無論扉に錠はしないから。』

『はい』

コロンブスに眞の葉と微毒を贈つた祖先その儘の敬虔さを以て、一桿すると去つ
て往きました。

氣が和みますね。心地が解れる思ですよ。いゝ心地ですよ。

禁酒の國へ入り、酒を飲み、女の入り兼るホテルに女が来ようと云ふのです。

横濱を出る時の棧橋の光景も、銀座や新宿の胸の悪さも、映畫館内部の悪心も、
疾うに忘れて了りました。洋行の目的？ 他の人にそんなことを云ふものぢやあり
ません。叱られます。

私ならこそ、それがびたりと合致してゐるのです。

須叟——何ぼの時が経つたか、實は狸から睡込んで了つたらしく、ふと私は起さ
れてゐるのです。

『旦那』

髓にポイーの聲がした。だが見開いた眼の前に立つは窈窕たる美人です。

『よく来たね』

『え、私は本當は来たくないのですが、たつてといふことで来ました。』

『それはうれしい、感謝するよ』

『だつて、御互にとても無駄になる金が多いのですよ。』

『ふう……………』

『ね、それぢやどうか支拂つて下さい』

『いゝとも、幾何だね』

『私には三十弗でいゝのです』

『えゝ？』

『だけど、その外にボーイに五弗と、今の人に十弗はやつて下さい……………私もこれで往復は車に乗らねばなりませんし、だから本當にホテルは詰らないのですよ』

『ふう……………四十五弗、五十弗！』

酔は醒めました。なかに、キスキーの壘がポケット用の小さい物だつたからです私は氣前が好いのですから、斷じて驚いて醒めた酔ではありません。

『何故もつと素直にホテルに來ないんだね……………だから金が餘計にかゝつて詰らないんぢやないか』

『さう、素直に來ると捕まります……………アメリカでは今ホテルへ來ることが一番危

険なのですから……………それより私の宅へ被居れば最も安全でそして楽しいんです』

『ふん、それぢや……………これから行かうか』

『それは嬉しいですわ……………ですけど、それでは、此處と、私の宅と兩方の金を貴郎は支拂つてくれるのですか』

『無論』

『まあ嬉しい』

『だから先に行つてゐるといゝ、直ぐ行くから……………處でお前の番地と、それからこれが車代だ』

『さう……………』

女は私の五弗を受取ると、自分の住所を認めて、いそぐと出て行つた。

斯ることもあらうかと、私は素早く身の廻りを纏めると早速出發の用意をした。

『お出發ちですか 紳士』

ボーイはアメリカが海底に沈んだ如うな顔をしてゐる。

『いや、さうぢやない。あの女の宅へ轉住だ。明日朝来いよ。索晴らしい趣向をして待つてゐるから……これは、その車代だ。チップは明日やるから』

『それは、お氣の毒です。濟みません』

私は五十弗を斯くて十弗で濟すことが出来た。それにしても何といふ私は規頂面な、氣前の良さであらう。決して私は五十弗を吝んだのではなかつた。たゞ、それよりも五弗宛を二人に與へる時の二人の悦びが見たかつたからだ。これは諸君も信じてくれることと思ふ。

處で、私は決してこの女がホテルへ來ると身入りの少ないのを厭ふやうな心地から、その反對で出費を嫌がつたのではない積りだつたが、處が私は、その夜の列車に乗るべく、シャトルの停車場に立つてゐたのだ。そして、神に云ふ心地を以て、敬虔な祈り心に私は云つたことである。

『お眠みなさい！ シャトルよ』

ホテルに棲む美人

何しろ女の居る部家の番號が判らぬ。その上女の名も知らないのだ。とんだ堀川御所が出来上る所だ。バンクーバーへ着いた早々の私の活動だ。

窓から見ると自動車運転手は、假睡をしてゐるらしい。心地良さうな横顔が見える。

と、この時私は思出してゐた。それは卅年の昔、笈を負ふて東京へ遙々と九州を立つて来る時、何々流の皆傳の腕を持った私の祖父が云つてくれた訓話の一節だ。

『知らぬことは訊け』

やはり日本人は豪い、と、この時も又私は考へたものだ。

で、私は威勢よく又廊下を歩き出した。そして運好く出會つたのが掃除女だ。これが頗る美しい綺量をしてゐる。

『君、このホテルに娘さんはゐないか』

『私もまだ獨身で、娘です』

と澄してブルムを抜についてゐる。

『それは丁度いい。それぢや訊ねるが、君が私の相手になつてくれるか』
『ふふつ………』

娘は笑ひ出した。それで、私は更に眞険になつたものだ。

『いや冗談ではない』

『それは六十七番の女のことです。』

『六十七番？………キュー』

で私はその女の前を走り去らうとすると、後ろから笑ひ聲が追ひかけて來た。

『でも先刻、客を送つて出て今は居ませんよ』

で、私は背筋へ氷がはいつたやうに、びくつとして立止つて了つた。

『何時頃歸るだらう』

『判りません』

『何時もはどうだ、出ると容易に歸らんのか』

『いろ／＼ですから一概には云へません』

『今日はどうだ、遅からうか』

『どうですか……』

『それぢや 後で来ようか』

『それがよろしい』

で、さつさと床を掃き始めた。よくもかうも生真面目に話をし働けたものだ。娘を見て、私は感心をしたことだつた。だが、恐らく娘の方でもその通り私を見て、内心感心してゐることだつたらう。こと程左様にこの私の女色調べは實に眞険なのである。

仕事となれば愉快ですからなあ。御互に。

『おや、旦那どうなさいました』

と、私が車に近寄るのを氣附くと運転手は早速問ひかけた。

『うむ、女が居ないといふのだ』

『へえ……どうしてそれが判りました。旦那自身で訪ねてみたのですか？』

『いゝや、正直な掃除女から教へられたのだから確だらう』

『あはゝゝゝそりや不可ませんよ旦那。その娘は正直ですよ。旦那の仰やる通り正直なんですよ……少しやりましたかチップを』

『チップ？』

『えゝ、さうですよ旦那。すこしやつて御覽なさい、キツト正直に居ると云ひますから……』

『な—ある程、さうか』

は、我乍ら抜かつた話だ。窓を仰いで私は暫く考へざるを得なかつた。

すると運転手はサイレンをブーブーと鳴らしてゐるのです。たぶん娘はさあつさあつと床を掃いてゐるのでせう。私はそんなことには構ひなく、感歎これを久しくしてゐたのです。

すると、娘の姿が窓に現はれました。

『居るか？』と私は上を仰いで問ひました。すると娘は笑ふぢやありませんか。

『旦那、居るんですよ』

と運轉手が云ふのです。そこで、私は又一度上を向いて娘に仕方て問ふたのですと、

『居る』

といふ答です。

『さうれ御覽なさい 旦那』

といふ運轉手の言葉などに耳を籍す暇もなかつた。私は再びホテルの二階へ上つて行つたが、無論支配人の眼を避けたこと云ふ迄もない。

掃除女がそこに居る。

『部家は何處だ』と問ふと

『教へてあげる』と云ふ。そこで、氣前の好きが又しても發揮されねばならなくなる。

『ありがたう。こちらです。』

と云ふから何處かと思ふと、直ぐ側の室だ。番號はなる程六十七番だが、妙な飛び番になつてゐる。流石喧しいアメリカでも此處バンクローパーとなるとすこしは面白い處であるといふものだ。

『どうぞお遣入り』

といふ聲が、私がノックを一つするかしないかに、もう内部から聞えてくる。

私は躊躇せずドアを排けた。

『今、戻つたばかりです……どうぞお遣入りなさい』

と云ひつゝ、外出着らしい衣類をさつさと脱いでゆく。美しい廿四五の女だ。

私はそれを見てゐた。無言で見つてゐた。何かしやべるのが惜しいやうな氣がして、蛤がそつと貝を開いて舌を出すのを待つやうな心地で、それを視てゐた。

『おかけなさい』

『今晚は』

頗る出し後れた挨拶だが、云はざるよりはと考へて、規頂面な私の性格が云はせ

た迄の事だ。

果して女は、つと笑つた。

『貴郎は面白い方ね』

『何か面白い遊び事はありませんか』

『おう、どんな面白いことも自由です』

『幾何です』

『六弗』

『六弗？』

『安いでせう』

『半分になると猶安い』

『面白い方ね。オーライ、半分でよろしい三弗にしませう。』

『三弗！』

そこで私は一度繰り返したのだ。

兎角、切つてから負けられると、まだそれ以上値切ればといふ心地がするものだから。

で、諸君。私は自動車上の人になつてゐるのだ。たゞ、忘れてはならぬことは、素晴らしい匂ひの香水がその身の廻りに薫ひこぼれてゐたことだ。

そこで、諸君は私のこの移り香と共に自動車上の人となつてゐる。

『おい、どこかもつと變つた處はないか』

私は賢くも、今の女に不満足の意を表はしてゐることの表現を、斯うして言葉に上せたのだ。旅でも紳士は氣取るものです。

『もつと變つた處ですか。』

果して運轉手は驚いた様な風をして、暫く考へてゐた後、

『それでは黒人の居るアパートへ参りませうか』

『黒人？』

諸君、暗闇に眞ッ黒な女が裸になつて動いて見せるのは、もう今の處では澤山と

いふ氣がするではないか。

『いや黒人は澤山だ』

『それでは、どういたしませう』

『ちや仕方がない、ホテルへ歸つてくれ』

『ホテルへお歸りですか』

『あゝ、何だか氣が進まぬから』

『はい』 車は走りだした。

だが、本當は私は疲れてゐるらしい。無理もない、東洋の異邦人がこの大外れた探訪であるものを。

車は間もなく止つた。それは、ホテルバンクローバーの玄關だ。

何といふ氣の軽い心地のすることだ。やはり私は君子なのだらう。疲れた後は正直に休養を欲するから。

やれ／＼さて一休みしよう。

懇切に媒介する黒女の情

さて私の女色調べもいよくニューヨークへ進み入つた。弗の都である。アメリカの心臓である。私もいよく眞険にならざるを得ぬ。

で茲は名にして負ふニューヨーク百二十四丁目の一廓、即ち黒人の住居する地域である。そこで地下鐵を棄て上ると、私は教へられた通りのアパートを探ねるのだ。

漸く探ね當た私の前に現れたその黒人女の顔を視守つた。その顔の中に發見られた眼を視守つたのだが、兎もすると扉内の仄暗さの中に顔の全體と共に消えて了ひさうに見える不安があるので、私はその眼を見逃すまいと凝視てゐた。

『遊ばせて來れないか、Aから教へられたのだよ』

と私が云ふと女の顔がくしゃくしゃと皺がよつたと思はれたが、それは笑つたのだつた。頼りなくもある。

『おはいりなさい』

でやつと内部へ入れられた。

『迎も警察が厳しいのでね』

『そんなに厳しいのかい』

『え、此處も先月越して來たばかりですよ……もとは向方のアパートの五階に居たのですが、どうも危険になつたので、此方へ引越したのです』

『それは心配だね……處で娘さんはゐるのかね』

『え、こつちへ被居い』

と、女は私の腕を捉る。そして次の室へ這入ると、急に女は態度を変えて、親しさを増してみせる。由來、私は黒人女から大切にされる型らしい。

『今日は一人しか居ませんのよ。それでいゝでせう。』

『いゝとも、どんな娘だね……もうその外にはゐないのかね』

『いゝえ、まだゐるんですけど、皆、客に連れられて出かけてゐるんです。』

『それぢやその娘を見たいものだね』

『今、直ぐ來るでせう、その間は暫く私と此處で遊んでゐませうね』

『此處で』何だこんな室で遊んでゐたつて始まるまいと、私は邊を眺めると、女はすかさず私の腕を捉つて立上つた。

『貴君は珍らしい踊を習ひ度くないですか……一緒に踊りませう』

『踊り……そいつあ苦手だ。まあ一人で、やつてみせてくれ』

『あら、それぢや見てゐて下さい……』

と、女はくしやくしに眞ッ暗に顔に皺をよせて笑ひ乍ら、踊りだしたものだ。

處が、それは蜻の頭を鉤に釣して、その下部を前後左右に振る如うな踊りだ。詰りは私達には聯想なしでは見とれぬ姿を見せるものだ。これが商賣上に役立つ譯だなる程、ダンスは難かしいものだ、私はこれを眺めて沁々と思つたものだ。わざ／＼生業を棄て、ダンスだけを習得しに洋行したらしい私の知人彼氏の事を思ひ出したのである。

こゝで、知人彼氏なる者を一寸紹介さして貰ふこととする。どうせこの黒人女はまだ腰をふら／＼させ乍ら、五分や十分は踊り續けてゐることだらうから、それを

見乍らその間に彼氏の洋行美談を一鍵申上げることとする。

彼氏は年若き眉目秀麗の好男子であつた。が、彼氏はその卅才代の若さにも不關ふと洋行して箔をぞつけんと思つて、無理算段の末漸く洋行を遂げたのであつた。

其後の彼氏は日夜を籠めて研究室に——であるが、それは残念乍ら内地に在る誰にも詳細は知れてゐない。で、たぶんそれは舞踊の研究室、それも町のだらうといふことに決定したのだが、兎にも角にも彼氏は滞留二年の行を終えて天暗れ新歸朝者として横濱埠頭に降り立つたのである。誠に堂々と、汐の如き出迎人の間を別けて降り立つたのである。といふのは、自分の出迎人が何處にゐるやら薩張り判らぬ迄に、誰か他の知名な人の新歸朝を迎える人波で、埠頭は埋つてゐたのである。

で彼氏である。埠頭から驛頭へ、驛頭から懐しの東京の内へ戻り込んだのであるが、それで二年の洋行は完全に終結したのである。

處がその舞踊は教授たるには未だ修養の足らぬ部分の方が多いのであるさうであり、不遜なる世間は禮讓を知らずこの新歸朝者を迎えるべく何等の途をも講ぜぬ。

訪るものがない。そこで、詰り失業が彼氏を訪れたのです。爾來彼氏は快適に諸方を訪ひ歩くことを日課として、而して談ずらく、

『ダンスはですな……』

さうでしたダンスでしたな。話は本筋のダンスの話でしたな。左様、黒人の女は今丁度ダンスを止めた處です。近寄つて來ましたよ、私の傍へまた。あつ、私の腰へ手を廻して横へびつたりと腰をかけた。おつ、熱い呼吸が私の片頬を撫る、撫る『ね、旦那、あの娘の來る迄、私が踊を續けてゐたいのですけど、すこし疲れましたから休みますわ、ね、貴郎はお酒を召上らないのですか』

『お酒——か、すこしは召上るよ』

と私は、へどもどしたものだ。だと云つてこんな處で飲む酒は酒よりも弗を飲むと同じで、まだ酔はぬ内に財布の方が空になるのだから、うつかり、大いに飲む等とは云はれない。

『さう、それでは何を飲みますか』

『だなア……ちよつぱり甘い酒でも飲まうか』

『直ぐ持つて來ますから……』

と女は出て行つたが、直ぐ又引返して來て

『今下女が買ひに行きましたから、直ぐに來ますから待つて下さい』

と、頻りに私の機嫌をとる。そこで私は相手の女が何時來るのか、居るのか居ないのかそれがそろ／＼疑はしくなつて來て、更めて室内を眺めやつたものだ。が、別に何の異變も起りさうでなし、仕掛のあるやうな物語りにありさうな家でもなさうである。

下女が酒を持つて來たのを、二つのコップに注いで、ちびり／＼とその一つを私は嘗めてゐた。弗の味はさう大したものぢやないと肚の底で思ひ乍らね。

だがいよ／＼退痛になつて來さうだ。それを感じるか黒人の女將は益々、懇切に私を慰めるべく背をさすり、腰を抱きもたれかゝりして大いにこれ努めてゐる。

然しこれでは依然退痛である。まるで、日本の東京のカフェー邊りで女給とでれ

でれとでれついでる程度の圖だもの。これでは折角、海外萬里、異邦の空へ迄遠出をして来た甲斐のないこと夥しい。

將に私は決意一番、歸。ことを告げようとした時、別の方の扉がすうつと排いて一人の女が這入つて来た。と同時に他の方の扉が細目にまた排くと、ちらつと男の姿が覗いたと思はれた拍子に、今、這入つて来た女はひらりと跳び上るやうにしてその男の覗いた扉口から消えると、外側で何か話聲がしてゐる。が、それが次第に玄關の方へ消えて行くと、ばたんといふ玄關の扉の音がした。

直ぐ女は一端消えた扉口から再び現はれて来た。そして、猛烈に媚を浴せかけて私に迫つて来た。

『何だい、今のは客ぢやないか』

『え、だつてもうよろしいのよ。歸つて行つたのだから』

『へえ、今迄居たのかね』

『え、逆も愚圖々々してゐる客でね、つい貴郎を長く待たせて了つたのですよ、』

すみませんのねえ』

と、只私が待つたことを不快に思ふか氣にしてゐる、と思つたらしい。

處が、この女が頗る困難な容貌の所有者である。如何に熱心な斯道の研究者である私と雖も、聊か忸怩たらざるを得ない譯である。で、豫定變更、私は立上つた。

それと同時にこの室を出さうにしてゐた女將も、も一人の女も撥かれた如うに、私の側へびたりと寄つて来た。

『あらどうしたのです』

『どうするの？』

『いや。今日は酒、酒に酔つたらしいのでもう駄目だ。私は兎角酒に弱いので。飲まぬことにしてゐるのだが……今日は餘り愉快だつたので、ついうつかり飲み過ぎたらしいのでどうも氣分が悪くなつた』

『それぢや、いぢやありませんか……どうせ眠んでゐれば癒るでせう。』

『いゝや、すこし歩いて来ないと私の酒の酔は醒めないのだから……これはとんだ』

ことをしたよ』

『あら、さうですか、それぢや酒なんか薦めるんでなかつたのに……』

『でもきつと来るのでせう、ね、旦那』

『来るともくこれだけ待たされただけぢや話らんから、キツト来る』

『ぢや待つてゐますよ、きつとね、ね』

漸く三弗の酒代——高いこの酒代を拂つて私は外に出た。

諸君よ、如何に私の事業には多くの費用を要するものであるかが充分知つて頂けよう。私はこれ程の徒勞と冗費をも忍ばねばならなかつた。これといふのも、この前人未踏の女色調べといふ崇高なる事業を完成さしたいが爲に外ならぬ。諸君よ、どうか私のこの苦勞を購つて呉れ給へ。

おう、肩が凝ること……考へると先刻、黒人の女を傍に密着きりにしてゐたので、姿勢の關係から出た疲れらしい。どれ、うんと大きな伸をして一番……諸君稀に一人でのんびりとしてみる事を、どうか私の健康の爲に許して下さい。やれ、やれ。

それを内職とする婦人の稼ぎ場

ニューヨークの上町は百五十丁目界隈、何だまだニューヨークか等と云つては不可い。諸君の知る東京の數倍ある世界第一の大都會ですぞ。まだく〜ニューヨークを堀り立てゝくれば、本書數冊に滿つる程の話はある筈だ。

そのニューヨークは上町、百十五丁目界隈、にあるアパート群中の一に、職業婦人等の來る家ありと、傳へ聞いた私は、ある日、例によつて唯一人で出かけた。

が、正直の所その室が何邊の何號かすこしも目星がついてゐないのであるから私は少々困つた。そこで私は我頭の働に俟つことゝしたは、諸君の想像の通りであるで、私は良き伴侶一人を發見したのである。彼は日本人であるが、謂ふ所のメリケンジャツプで、又の名をデョージとなん呼ぶのである。凡そ何年、何十年とアメリカを流れ棲む日本人である限り、名の二つや三つ持たぬ者はないことである。杉平造が杉デョンであつたり、田中守吉が田中デョージであつたりするのである處の我がデョーヂと手を携えて私は、ニューヨーク市の百十五丁目附近のペープメントをメリケン流に颯爽と大股に歩いたのである。姿から形言葉に至る迄、押しもおさ

れもせぬ板についたものである。諸君、充分想像を逞しくしてくれねば困る。斷然銀座新宿道頓堀等と類を異にしてゐるんだから。しつかり思ひ浮べてくれ給へ！

そこで、何だつけ……おう、それ我がデョーヂと手を携えて私はニューヨーク市の百十五丁目附近のペープメントをメリケン流に颯爽と大股に歩いたのである。姿から形、言葉に至る迄、押しも押されもせぬ板についたものである。諸君、充分想像を逞しくしてくれねば困る。斷然、銀座、新宿、道頓堀等と類を異にしてゐるんだから。いゝかね？ 本當に目に浮べてくれ給へ。

そこで、我がデョーヂと手を携えて私はニューヨーク市の百十五丁目……吁何といふ魅力ある話題であらう。私はこの一場景の説明に千頁を費しても猶飽き足りぬものがある。だが、詮方なくも、話を進める。

そのニューヨーク市の百十五丁目附近のペープメントをメリケン流に颯爽と大股に歩いたのである私とデョーヂの姿が、とある五階建のアパートメントの階段を靜かに昇つたのである。

『大丈夫だらうね』

『うう、大概大丈夫なんだ……何しろ前に来た時から、まだ二ヶ月とは経つてゐないんだから。キツトまだゐるよ』

『でも、君の来たのが一ヶ月前でも、その前に既にその婆がその室に三ヶ月も居たのなら、丁度移轉する時期だったといふことになるのぢやないか。』

『う、う……そりやさういふことにもなる譯だが、でも大丈夫だよ、兎に角ぶつつかってみるといふことにするんだ。』

『何あんだ、やつぱりさうなのかい……ぶつつかってみて居なければ、また次を探すといふんぢや、一向に確でない案内といふ譯だぜ……頼りないね』

『悲觀するなよ、大丈夫だから……』

この東洋君子國の二青年紳士は、斯くてこのアパートの二階の廊下に出て百何十號かの番號のある室の前に立止つたのだ。

『おい、この室かい、何とも書いてゐないが大丈夫だらうな』

『頼むぜ、何處へ行つたつてメリケンのアパートにや、表札なんていふ物を家の前へなんかあぶら下げないんだから……そんなぢや、まだくだぜ』

危ぶんで問ふ私をこのメリケンヂヤツプは斯う云つてへこまして了つたのである。彼ヂョーヂはやを扉に近寄るとノックしたものだ。その辭、左手をそつと襟飾にあて、曲りを直してゐるのを、後方からだつて私にはちやんと見えてゐる。くすつと私が笑つた拍子に扉が排いた。

『誰方ですか……』

『うへつ……』

ヂョーヂはたちくとなつてゐる。私は早速踵を返すと廊下を素知らぬ振で歩きだした。立止つてゐられる義理ではない。

我ヂョーヂは排いた扉の前で、頑固な老爺と對きあつてゐるではないか。それが全然彼の話で聞かせてゐた老婆といふのと相違してゐることは、如何に初見參の私でも直感された。であるからそれを見棄て、逃げたのでなく、その恥しさうな姿を見

る失禮を敢てせず、私は踵を返したのである。

私は内心で盛んに笑つてゐた。だが歩はほとんど進んでゐるので、とう／＼この長い廊下の行止りまで来て了つた。見るとそこに上へ通ずる階段がある。私は後方を振向かうともせず、勢よく上へ昇りはじめた。

今更、廊下に立止つてチヨーチの来るのを待つて居られる譯でもない。そこで階段を上り始めたのだ。何處まで昇る積りかそんなことを私も知らない。脚まかせだ。今頃は、あの頑固老爺に捕まつたチヨーチが、老爺の節くれ立つた兩掌に釣し上げられて、下のベープメントへ放り出され、まるでブルフロック(食用蛙)の如うになつてゐるんぢやあるまいか、と、流石は君子國育ちの私だ、すこしばかり心配で、思はず吹き出してゐると、どすんと背を押した奴がある。

驚いて振向くと、チヨーチの人懐こい眼が笑つてゐる。

『薄情だぞ。をいてき堀になぞして』

『紳士は人の恥を眺めるものでないからね』

『ふゝゝゝ 紳士か。いゝとも……處で今の老爺にや面喰つたよ』

『どうして切り抜けたね……私はまた、ベープメントでブルフロックにでもなつちやゐないかと心配してゐたぜ』

『心配して失笑者もなからうぜ……話は簡単に解つたよ。何といふ名か知らぬが、一ヶ月前迄居た老婆はこの上の五階に移つたらしいことを聞いたが、確なことは分らんと云つてたよ。まあ行つてみよう、どうせ序でだから』

『ふう……二階へ来たのに序が五階ぢや、序の方が遠いんだな。仕様がな行つてみるか。』

『黙つて行くことだ、その代りにこんどは老爺でなく美人が、につと笑つて顔を出すといふものだから……』

で、颯爽たる姿に、元の意氣を取戻した二人の青年紳士は、婦人の眼のあるアパートの廊下を歩調揃えて五階目差して昇つたのである。

漸く五階の室の前に立つた。

チヨーチはノックしかけて、ふと振向いて私を招いて低聲になった。

「大声出しちゃ不可いぜ。静にしてゐないと断られちまふから」と、一つ肩を揺ると彼はコツコツとノックした。

すると扉は直ぐ排いて、割合に優しい感のする老婆が顔を出して、ちつと二人を視てゐる。

「や、今晚は」

チヨーチは馴染らしくやつてゐる。だが、まだ日は暮れてはゐないのだが。

「友達を一人伴れて来たよ」

「どうぞ……」

老婆は一步を開いて、はいれといふ意を見せたので、二人は直ぐつかく〜と室内へ遣入つた。扉に鍵を下したららしい音を私は聞いて、そこにあるソファアに腰をかけた。

チヨーチは向ふ側の方のソファアにかけると、直ぐ婆さんに話かけた。

「二人だか居るかい？」

「何人でも居るんだけれど、今直ぐと云つては一寸都合が悪いですよ。」

「だが、どの位待てばいいんだい。またこの前みたいに工場の機械のカケラみたいな年老りの女工ぢやあるまいね」

「いゝえ、若い綺麗な人ばかりですよ」

「一人なら今ゐるのかい？」

「とつても素敵なお美人が一人ゐますよ……寧ろ二人ともその美人にしたらどうです、とても有名な美人ですよ」

「二人ともつて……」

日本語でいつてチヨーチは私の方を視てにやつと笑つてみせた。

「何處にゐるんだね、その大それた美人といふのは」

「向方に休んでゐますよ」

と婆さんは頷で左手の扉の方をしゃくつてみせる。

「それで何かい、その美人は玄人ぢやないのかい。」

「とんでもない……有名な商店へ出てゐる立派なシヨツプガールですよ。」

「ふう……」

「それとも、どうです、いつそ玄人で商賣人なら直ぐ二人揃えて呼びますが、それにしますか」

「うう……」

「とに角、その美人を見たいものだな、その上の事にしようよ」

「さうですか、貴方もそれでよろしいか」

と、婆さんは私の方へ問ふてきた。が正直な所、私はいさゝかそれは恐れざるを得なかつたので、たゞ黙つて笑つてみせた。

すると婆さんは一つ點頭いた。

「こちらは溫和しいのね、では、今その娘を一寸見て來ますから、すこしの間靜にして待つてゐて下さう」

と、婆さんは奥の扉から出て行つて了つた。

「本當にそんな美人がゐることがあるのかい」

「たまにや本當の事もあるが、まあ見なきや何とも云へないね」

「シヨツプガールつて云つたが、これは確かい」

「うう それは大抵本當だよ。だつて日本と違つて、シヨツプガールが一番町に多くゐるんだから、勢當然ぢやないか。」

カタンと扉の把手の音がしたと思つたらうつと左手の扉が開いた。

見ると衝立が立つてゐて、よく内部が此方からは見えぬが、臙脂色の重さうな幕が下つてゐる。

老婆が笑顔で招いてゐる。チヨーチは颯爽と立上つた。私は百パーセントの興味を抱いた。間違えないで——よろしいか。颯爽とした意氣で立上つたのはチヨーチで、靜かに兩掌をもみ乍らそれに續いたのが私だ。

衝立の横を廻つて幕の前へ出ると、おう素晴らしい南國的な場景が展がつてゐる

六八
 臙脂の幕の向ふに眞ッ黒のダブルベットが一基ある。その上に薄い黄色のかけ布を體のすこしの部分に纏つた裸體の女が横臥してゐる。その指先に光るルビー……光るルビーが怪しいとよく見直すと、それはシガレットの火だつたが、兎に角、素敵な美人が眞を吹かしつゝ、ちつと此方を見て笑ひかけてゐるのである。
 『オーライ お女將、俺は契約するぜ』だつて、チョーヂの奴は絶叫して了つたものだ。

それでこの家はお終ひ。

でも、私はそれで一人で歸つたし、その後——その日その時の後のことも、その日以後の彼の動靜も、私は全く知らないのだ。

メリケンチャップの一人と知り合つたり、それを忘れたりすることは、電車に乗り合した隣り同志の人の如うなものだ。

それでこのアパートの家の話はお終ひなのである。

眼を塞いで心地顎を前へ突き出して諸君自由に思ひ出して見たまへ。臙脂色の幕

の奥の黒いベットの中に眞珠の如うな裸體美人が黄色い薄布を纏つて笑ひかけてゐる。手には眞の火が眞ッ赤に光つてゐる、動くともなく煙が靡いてゐる……そこで、チョーヂの奴が絶叫しちやつたのだから、それでお終ひです。私が知つたのでなく、チョーヂが経験したのだから、私にはそれ迄の處——臙脂色の幕の奥に黒いベットの中に眞珠の如うな裸體美人が黄色い薄布を纏つて笑ひかけてゐる。手には眞の火が眞ッ赤に光つてゐる、動くともなく煙が靡いてゐる……でお終ひなのであるから仕方がない。

眼を塞いで心地顎を前へ突き出して諸君自由に思ひ出して見たまへ……臙脂色の幕の奥に黒いベットの中に眞珠の如うな裸體美人が黄色い薄布を纏つて笑ひかけてゐる。手には眞の火が眞ッ赤に光つてゐる、動くともなく煙が靡いてゐる……でお終ひなのである。モ一度……眼を塞いで心地顎を前へ突き出して……なにモウ御解りですか！さうですか。それは結構でした。

キヤパレーの女色メロウ

私が日本に居た頃、銀座や道頓堀で、カフェーやバーの経営者達が、そのカフェー又はバー経営の内部にダンス場の兼営をも許可してくれと當局に届出て、遂にそれが不許可に終わったといふことを聞いてゐた。その不許可に終わった處のそのものが、こゝに云ふキャバレーなのである。ちやんとノートして下さい。この點は頗るデリケートで大切な點でありますから、或は試験に出るかも知れません。で以下そのキャバレーの實驗に移ります。

ニューヨーク………まだ？然りそのまだニューヨークのタイムスクウエーにですな。タイムスクウエーは大新聞社タイムス社のある通りです。が、そのタイムスクウエーの裏通りに、アメリカ名物の「ナイトクラブ」や「キャバレー」があるのです。

で、私は今日は過日のメリケンチャップでなく、ニューヨークプランチに勤めるさる日本の大会社の社員である處の、若き紳士と共に芝居見物に行つたのです。そしての歸りだから夜も十二時に近い頃だつた。このキャバレーへ歩を運んだものでは

でそのキャバレーはたぶん既に始まつてゐるものと思つてゐたが、行つてみるとまだ始まつてはゐない。早い處は十時頃からと聞き及んでゐたのに、私等の行つた此家は十二時後でなくば始まらぬものらしかつたのである。

處で諸君、この時間は日本の晝の十二時をいふのでなく、アメリカの眞夜中の十二時のことを云つてゐるのですぞ。

それなら日本の晝だらうつて、ですか。憂さいですなア、いや私の云ふのは要するに向方の夜半十二時から始まるキャバレーの事です。日本ならば十二時を限り一切の飲食店が、バタリバタリ大戸を下ろさうといふ時刻のその時から、漸く眞劍の盛況に入らうといふのが、この種のキャバレーなのであるんださうです。

で、私は白菊の如き青年の紳士とつゝまじやかに、このキャバレーの一隅の席についたので。すると、直ぐボーイが註文を取りに來たですよ。

すると白菊の紳士は何かを註文した様子である。私は何を註文したかが問ひたかつたのであるが、紳士らしからぬことゝそれは止めてゐた。だが、白菊の紳士は笑

顔で私に説明してくれた。

『御存じでせうが、此家は何か常に飲んでゐなければ不可いといふ規定なのです。その積りでコップを空にしないで下さい。その代りにコップにはいつてゐる限りは、それこそ日本のカフェ定連黨の如く、一杯のソーダーで四時間でも五時間でも隨意に腰掛けて見物してゐればよろしいですよ。』

『はい、あ、さうですか……それは然し安上りでよろしいですね』

『その代りチップは普通の處の尠くも三四倍はをくのが習ひですからね』

そこへ注文した飲み物が来たニウビヤード。ほんの小々のアルコール分が含まれてゐる飲物だ。それだけにそゞろ本物戀しい感が深くなる。

見渡すと大分人は詰めかけて来た。いろんな職業の人がゐる。白菊紳士は始終にこゝとしてゐる。

『大體こんな家へは當なしでは來ないものです。御覽なさい……彼所にゐる女、此方の女、みんなあれは商賣人ですよ。誰か好き客を探してゐるのです。それから

向方の二三組と此方の組ね、あれは戀人同志ですよ……その他ののは、大體この家でそれ相當の相手を發見するか、逢引する豫定で來てゐるのです……今に見てゐると判りますが、ダンスが始まればそれ／＼パートナアになると、やがて踊つた後、手を取り合つて何處かへ消えて行きますから……』

『なる程ね……』

然し私達の會話は忽ち打切られねばならなかつたです。それは、忽ち湧き起つたジャズ奏樂の陽氣さに掻き消されたが爲にです。

おう、其處にも此處にも、踊りはじめた、踊りはじめた。何といふ自由な世界だ『これで朝迄でも踊るんですよ、好きな同士でね』

白菊紳士は首を伸して私の方へ聲を大きくして話で聞かせてくれた。

一切り踊り済むと、客は全部各自の席へ返つた。が、見逃し難い光景が至る所に生起してはゐるではないか。踊始まる迄は各自離れはなれの卓子にゐた者達が、既にこの時には、それ／＼一組宛の男女となつて、新しく親しさに語り合つてゐる。

おう何と惱ましい光景でそれがあることよ！

こんどはキャバレー専属のダンサーの舞踊だ素敵な肉體が、素晴らしいエロ臭をふんだんに振撒いて踊る〜。

するとこの時迄私の傍の卓子だけが——だらう遠くの方は充分判り兼ねる——空いてゐたのが、何時の間にか一人の淑女によつて占められてゐる。

白菊紳士の眼が意味あり氣に私に笑つて見せてゐる。私の明敏な頭が直ぐそれを感じたこと特に勿論である。

その女の方を見ると、素早く女は私に笑ひかけてゐる。それと眼を合してから、私は白菊紳士の氣を兼ねてその眼を見た。紳士は朗かに笑つてゐる。

『どうぞ、御自由に』

『でも私一人では……………』

『いゝえ、私も直ぐ發見しますから』

吁、止ぬるかな……………これは失言した。私はこの事は詰らなく斷じて無償では人に

告げぬ積りであつたものを。致方ない。

事情は眞實、右の通りでこの白菊の紳士は忽ち間もなく一人の若い美しい婦人と睦しく語り合ふことになつたでないか。

踊は幾番も續いた。

私は思はず知らず飲み物を干しては、幾度も次の注文をボーイから督促された譯だ。どうしても周囲の零團氣がかうなので、つい手がコツプに出るので、決して新しいこの女の友人を得て夢中になつた譯では夢更ない。

女はいろ〜と話かける。踊らうといふ。そして結局十弗と契約を結んだ。そんな會話を交し乍ら卓上のメニューをふと手にして私は眺めると、女は直ぐ私の手を抑えた。

『お止しなさいよ、こんな所で食べたつて身にもつかずに高いばかりですから』
『うゝゝ』

まつたく驚く程の高價さなので、私はこの場合、婦人の申出を受容れる紳士の美

徳を發揮して、素直に注文を見合せたのである。

今や場内は全く歡樂の頂點、歡喜の渦卷の眞ツ只中の觀がある。時刻は、さう三時に近からうか。白菊紳士も先刻から二三回の軽いダンスに、幾分疲れたらしい様子である。私は曉近いこの時刻には正直に不慣れであるので、無性にベツト戀しくなつて來た時である。

『どうです、そろ／＼引上げませうか、こゝの連中はどうせ朝迄やつてゐるんですから。』といふ白菊紳士の言葉だ、私は忽ち腰を上げさうにした。

『参りませう、大分眠くなりましたよ』

『はゝゝゝ、さうでせう御尤で……。では』

で約七弗の支拂を濟せて私達は立上つた。入場料の五弗と共に十二弗程の金を、このキヤバレーに私達は落した譯である。

外部に出たが白菊紳士と私とは方角が違ふ、紳士は終夜運轉の地下鐵で行くのであり、私は直ぐ近い處へタクシーで行くので、しかもその私の行先はこの新しき女

の友人が知つてゐるのだ。

『では、また』

『いろ／＼ありがたうございました。では』

『お眠みなさい』

『お眠みなさい』

そして二人の女同士も

『グナイ……』

と云つたものである。

で、私達は、いや、既に私達はキヤバレーの外部へ出たのである。であるから、キヤバレー女色の項はこれで終つてゐるのだ。餘計にしやべつちや不可ない！

では諸君……いや、それ以後の行動は、それ以後の項目に屬し、他の分類に入るべきですから、従つて本項はこれで終るのであります。では、皆さん、ノートを止めなさい。そして、次の項目でお目にかゝりませう。

性慾の洗濯

さて長らくの馴染の土地メリケンにもいよいよ別れを告げる日が来た。

これが私には別様の意味で悲しくなるのである。といふのは……待つた。私はその悲しくなる場面の前へ諸君を伴れて行つて、百聞に優る一見を乞ふことゝしようでは、旅装を整えるから、一寸静に待つてゐてほしむ。

悲しくなるですな……これは古靴下と、こんなものはトランクへ入れなくもよろしいから棄てると……棄てるといふ言葉があるからきつと悲しむでせうよ、ね。だが決して今棄てた古靴下と同じなんてことは夢更ないのだから、どうかこの心地を正しく傳へたいものですよ。

いや、私の獨語の意味は今直ぐ判りますから、今私に説明を求めないでをいて下さい。

どうも荷拵えが後れて困る。さて、と、古靴下を棄てた次に、このシャツを藏つてをいて、この繪はがきも記念に此處へ入れると、それからこの服は此方と、おうッ！これは、手斤だ。將にあれの手斤だ……あゝ、不可いですな。これは棄てず

に持つて行きますか。

誰のだつて云ふんですか、駄目々々、いくら今訊ねても私は説明しません。その代り待つて下さい、この荷作りを終れば直ぐ出發しますから、その途中諸君に一切の悲しき物の源を見せることにするのです。

どうも斯う餘談が多くつちや、さつぱり荷拵えが進みませんよ……どうか静肅に。どうかお静に！

あつ、時間が迫つた。だから諸君は静かに待つて居て呉れねば不可いと云つたのだつたのに。もう餘義ない、一端これも、あれも皆一緒にしてこのトランクの中へ詰め込んで了ふことにする。吁、我がエルテルの悲しみよ。

さて、諸君、いよくこの荷を提げ私はこの懐しいアメリカを出發するのです、その途上諸君を一大悲劇の現場に案内することを約しました。さ、参りませう一寸、かうつと確にこの邊でよろしいのです。待つて下さい！

おう参りました、あれ向方から悲しさうな歩調……いや遠ひます、諸君の居ら

れる手前氣を兼ね、素敵に快活に歩いて来る可愛らしい女、さうですあれは今私の出發して来たホテルの女ですよ。

あれですか、彼女は私にこの滞在の一週間を素敵な親切と熱愛の下に、私を慰めてくれたのでした。然るに、悲しき異邦人の私は、今日こそこの土地を離れて歐羅巴へ向はねばならないのです。彼女の愛に反かねばならぬのです！いや、いや、悲しみは私よりも彼女の胸中を思ひ遣るとき、私の悲しみは數倍にされるものです。それにしちや快活過ぎるつてですか、とんでもない。みんなそれは人目を憚つて彼女の小さい女心がしてみせる外見上の技巧です。もし、今此處に他日がなかつたなら、諸君は想像もできなからう……あの、強烈な彼女の情……危ッ！……馬、馬鹿な、馬鹿なタキシードですよ。すんでの事に私は撥ね飛ばされて了ふ處だつた。實に亂暴な運轉手ですね、アメリカにもあんなのが居ますからね。

諸君、黙つて敬虔に、たゞ見てゐて呉れ給へ。私は彼女とどう挨拶すれば好いかに、昨夜から思ひ悩んでゐたのにそれが思ひ浮ばぬ内にとり／＼訣別の機會が來て

了つたのだ。致し方ない私は何とか慰めて、彼女の悲しみをすこしでも薄めることにするから……諸君、諸君は黙つて敬虔な心で、たゞ見てゐてくれ給へよ。

『テラオさん、待ちましたか』

『いゝや丁度此處迄來たばかりだつた……私のキテイもさうだつたのかね。』

『私のキテイ？ ほゝゝゝ、貴郎は本當に優しい人ね、私もその點で忘れないでゐるわ……だけど、もう今日別れて行くのに、私のキテイでもないわよ。ほゝゝゝさあ、何處かでお茶でも飲んで、そして元氣で左様ならをませうよ……あら、どうしたの變な顔してさ、テラオ貴郎病氣ぢやないの？ 病氣なら病院へよつて行つた方が良かないこと……』

『いゝや、そうぢやない、何ともないよ……だが、またキテイは馬鹿に快活ぢやないか。何か嬉しいことでもあるんかね？』

『嬉しいことつて、まあ嫌な人ね。今日迄の私のお友達の貴郎が、今日は歐羅巴へ出發するといふんでせう……こんな目出度い悦ばしいことはないぢやないの……』

さあお茶を飲みませう……此處がいゝ、この家にしませう。」

「ふん、なる程ね……そりや目出度いが、お前は淋しがらないから豪いよ。」

「だつて、まだ私は若いでせう、それにお友達ならまた發見するもの……たゞ、貴郎みたいな温和しい人があるかどうかは、一寸判らないけど……でも、あるわよ。

キツトあるわよ。えゝ、私、きつとすてきなお友達が發見するのよ。貴郎も私の爲に
ぜひ祈つて頂戴ね……おう嬉しい。」

「あゝ、祈るよ。そりや、ねえ……」

「貴郎、今日は餘程變な調子ね……新しい旅が不安なのでせう。氣をしつかり
しなさいよね、ね、東洋人つてみな氣が優しいのね。私祈つてあげるから、貴郎の
旅行が幸福であるように、新しい友人の良い女が發見する様につて、ね……ちや、左
様なら。長々と楽しかつたわね。ありがとう、では、壯健で確固していらつしやい
左様なら！」

「……………」

諸君、何を笑ふんだ。失禮極る。

そりや、なる程あの女は悲しみも泣きもしませんでした。だが、それがその民情の
相違といふものだつたのだ。たゞ、私はそれを知らなかつたのだ。ついつい東洋的
な愁歎場が演じられるものと思つたのだつたが、それにしてもメリケンは斷然
時代のトップにゐます。年若き娘の性慾生活にさへ、これだけの新しい意識がうか
ゞはれるのです。

何？ 私の自惚れだつてですか、否々。あの女が私を一週間如何に愛したかは、
たゞ私と彼女とのみがる素晴らしい戀愛行爲だつたのです。今の彼女の言葉にも
それが知れてゐるでせう、よ。

何？ 私が反つて泣きさうだつたつてですか……そりや、何？ 何？ 私が性慾
の洗濯人になつたのだつて？ え？ え？……

やあ諸君失敬します。何しろ船の出航時刻が迫つたのだから。

何とでも想像し給へ、笑ふなら嗤ひ給へ。私は兎に角戀愛……性慾洗濯なんぞし

たんぢやない。もつと東洋的な戀愛をしたのだつた。ぢや失敬！ 次は歐羅巴だ！

「税關」を伴れ歩く

私はアメリカの出発間際になつて、どうもすこし思遠をして、卑しい諸君中の少数者から冷笑されたやうに記憶してゐる。が、此處はちつとメリケンと桁の違ふ英國のロンドンだ、諸君もがっちりしてほしむ。私は無論、最早地球の半分を渡つて來た堂々たる紳士ですぞ。

で、ロンドンは伊國ぢやない英國ですぞ。ゼノフのやうに彼地へやつたり此地へやつたりせぬ様に、先づ最初から注意してをく。

古き歴史と多くの殖民地を有ち、その國旗に太陽の隠れた時のない英國も大英國のですね、一寸待つて下さい。話がどうも勝手が違ふ。これは小學校の教科書のこととで、私はその教科書にないことを説明する豫定だつたのだ。

で、そのロンドンのだが、そのロンドンが一番繁華な處はピカデリーと、オツクスフォード・ストリートと、も一つ最も新しく繁華地となつたリージエスト・ストリートの三ヶ所で、案内記や繁昌記に明に記述の出來ぬ繁華地、即ち女の最も多く出るので賑ふのがリージエストストリートであるのですよ。

で、そこへ——そのピカデリーへ私はある日の夕方からA君に伴れられて行つたのだ。このA君なる人は年若き學徒で、既に滯留期間を終へて將に歸朝せんとする前であつたので、その蘊蓄たるや誠に深甚なるものがあつて、凡そ行き交ふ商賣女の悉くの姓名でも知つてゐるであらうこと程左様に、這般の消息には通じてゐるのである。この方面のA君の造詣の深さを傳へることは、誤られてA氏の學殖のみ人に知られ世に傳へられてゐるのに憤慨した私の美くしい友情の發露である。どうか忘れず記憶してをいてほしいものである。A君は決して無味枯淡な文字ばかりを一杯に詰め込んだヴェルテルブーフ然たる學徒でなく、實に潑刺たる小壯有爲の士なること右の通りであると、繰々も私は申添てをく。

A君は己が掌を指すが如く、又はその學問上に於いて説く論理の如く、明晰を極めた説明振を以て私を拉し行く。

『そら、來た。あれ此方へ來る淑女ねあれがさうだ。見てゐたまへ、彼女は日本人に慣れてゐるから今にきつとモーションをかけるから。』

『へえ日本人にはモーションを女の方からかけるのかね。頗るアメリカとは違ふんだな』

『うん、でも日本人は愚圖で恥しがりやだから、その呼吸を心得てゐる慣れた女は必ず向方からモーションするんだ。そら近寄つた』

私はどうされるかと、摺れ交ふその女に注目してゐた。と、なる程女は私に近づきかけて通り過ぎた。

『どうだ的中したらう。處で、相憎近い處にゐないが……待てよ。居るぞ〜。そら向ふ側の舗道に立つて此方側を見てゐる若い貴婦人がゐるだらう。あれがさうだ見てゐるといふ、今に此方へ渡つて来るから……。ロンドンに見馴れぬ君の姿を見て一度は當つてみるから、ね、いゝよ我々はぶらぶらしてゐればいゝんだから。氣にして見なくもいゝから。』

で、私はその言葉通り素知らぬ振で、無駄口を利き乍ら二人で歩いてゐた。

すこし経つてから、私の後方から左側をすうつと通り抜けた女がある。Aはこつ

んと私の右脇を突いたが、私もその女がそれだとは氣ついてゐた。

すると、三四間も前へ出抜いた女は、ふと立止ると後方を振向いて誰か人を探す如うな振をしたが、私と眼を合すと、につと艶かに微かに笑つた。

Aはもう遠慮してなゐかつた。

『どうだ、ちやんと的中するだらう。だが決して應じて返答をしちや不可ないよ。憂さく付き纏はれるから……。おや。税關が来たぞ？ うん確に税關だ、ありや。』
何故に暮夜に及んでこんな繁華な處へ税關が、官吏でなくて税關その物が、而も來るといふのであるか、私は呆然として、Aの口邊を見てゐた。

『おい、彼處……。そらあの角の處に一人の日本の紳士と並んで仲好く來る一寸綺麗な女がゐるだらう』

『うゝあれか、判るが、それで……』

『あの女が即ち税關なのだ』

『税關だつて？ あの女が！』

『さうだ、あれが有名な税関なのだが、君はまだその因縁れを知らんか』

『いや知らない』

『さうか、あれが所謂ニツクネーム「お金ちゃん」となん呼び奉る商賣人だよ。その依つて来る處の故事は君と雖も知つて居るのだらう』

『あ、あれか、あれがね……さう云やあの眼元もどこか夢二式の挿繪に似てると云ひたいね』

『そんな評判があるらしいね、詰りはあの女には、ロンドンに渡り来る程の者の、殆んど悉くが税金を献じるといふ意味からだね、「税関」なる名稱が奉られてゐるんだ。そいつを知らずに得々として引張つて歩かせられるんだからお目出度い譯だよ。』

『なる程、だがよくもさう日本人が好きになれたものだね』

『好き？ 自惚れちや不可ないぜ。好き嫌いは習はしだぜ。蛇使ひもありや獅子使ひもあり、象使ひもあるが、強ち蛇が好きだから、でもなからうぜ……』

そんなことを思つてゐると、酷い脱税的處分が君の身の上に降りかゝるといふものだよ。

『止してくれ、兎に角かなり驚かされるに充分だね』

『どうだね、一夜を奢るかね』

『一體どれ程要求されるかね』

『要求に應じる氣なら大變なものだ。だが先づ大概が、先刻から見た連中で二磅から三磅、即ち邦貨に換算して約二三十圓といふ見當だらうな、どうだい？』

『いや今晚は眼だけの楽しみとしてをかうよ……それよりも コーヒーでも飲むで歸らうか』

『よろしい、だが、君はまだ英國のコーヒーを知るまい。』

『英國のコーヒー？』

『よろしい來給へ案内しよう。』

Aは先に立つて行く。私も黙つて従いて行くと、ピカデリーの地下鐵の入口の反

對側にある有名なスコットと云ふ料理屋の、五六軒先のカフェーへ彼はすか／＼と這入つて行つたものだ。

で、私はいつて驚いたのは、恐ろしい女客の多いカフェーであることだ。

素晴らしい広い家で、そつちこつちで食事をしてゐる人がゐる。即ち英國のカフェーは食事をさせるのだといふことが知れる。

だが、これは實は後に教へられて思ひ合したのだが。

で、Aは注文を済すと一と渡り室内を見渡してから、私に教へてくれるのだ。

『君、ロンドンのコーヒーは、ブラックとホワイトがあるのだぜ。ホワイトコーヒーはまたクリーヤーカフェー、ストロングカフェーとも云はれるんだぜ、そしてそのブラックなる物は實は大豆を粉にしたもので、コーヒーぢやないんだから酷いよ。』

といふ時に、そのホワイトが來た。コーヒーは素晴らしい芳醇な美味いものだ。『だが、君、この家はこれで大變に多くの商賣女が出入りするんだぜ……晝の茶の時だね、三時さ。それから、今よりも一寸早い頃なさあこんなものぢやないぜ、

今だつて、こゝにやね……居るよ、大分居るぞ、そらあれも、こつちも、さうだよ。』

Aは獨りにや／＼と四邊を眺めては笑つてゐる。私は、このAと一緒に居る時ばかりは、私があれば程にも信頼した私自身の頭の好さに對して滿腔の疑を抱かせられたものだ。何故と云つて、餘り名快なAの説明を聞いてゐると、私は手も足も出ぬといふ氣がするではないか。

諸君、私は賢い頭を有つてゐる積りであるのだが、さうでないのだらうか。どうも、私は今晚は私を疑はしくならざるを得ない。

そこで、こんな學徒のAと別れて今夜は私は早眠をすることとする。では、祖國の諸君よ、靜かに眠り給へ。

ハイドパークの垣間見

どうも私は昨日は、親友のAの蘊蓄に壓倒されて實に詰らなく時間を過したことを今日では悔いてゐる。

で、今日はこれから私は名にし負ふハイドパークの夜陰を冒すべく、宿を出たのである。が、諸君よ、私は斯る夜に相應しき好同伴のないことが泌々淋しく思はれるのだ。

だが決して私は今更女々しくもニヨークで別れたキテイのこと等を考へてゐるのではない。彼女は私の性慾の洗濯手であつたのであ……いや、違はない！ 諸君は強ひて私にそのビエロツトの役目を背負せる積りらしいから、私はもう云ふのを止める。

で、ハイドパークの夜にです。東洋の君子國に生れ、味氣なくも異邦人の淋しさを泌々と味はふべく運命の繩を手繰つた私自身がです。そろ、そろと漫歩を運んだのです。

そこは有名な野合密會の絶好公許場所だといはれてゐるとのことです。

で、私はそろそろ、と漫歩を運んだのです。

梢に睡る小鳥の夢を破らじと、誠に人知れぬ苦心を拂つてです。況んや、今宵の一刻を千金と契り合ふ人達の妨げとなること等は、單に想像するだけでも私は不快となるのです。

で、私はそろ、そろと漫歩を運んだのです。

だが、人の妨げとならぬ限りは、この旅愁を啣つ異邦の若人を慰めるべき好事態に接し得たきものと、私は異常な緊張の裡に、四邊の暗に氣を配つたのです。

で、私はそろ、そろと漫歩を運んだのです。

遂に！遂にです、私は唾をぐくりと嚙み下しました。そこに、身近の右手、森の草むらの中、老樹の影の邊りに、うごめく人影を認めて了ひました。私はその方へ歩く方向を變えねばなりませんでした。

で、私はそろ、そろと漫歩を運んだのです。

おう、神よ。若き人……だらう、大抵こんなことをする人は。さう

にしとく。若き人に幸福を齎せ給へ。斷じて警官を、この後三分の間は近寄せ給ふな。

おう、神よ！あの物音に速度あらせ給ふな。それは餘りにも熱した二人が思はずも音立てた接吻であつたのです。

おう、この異邦人よ氣を確に保て！

で、私はそろそろと漫歩を運んだのです。

あゝ、神、々、エリ エリ ラマサバクタニ！私は見て終つたのだ。行手のすこし左のベンチの上に何をしてゐるのを見たか。

私が瞬間立竦んで、次に目を開いた時、立ち上つた男はポケットから金を出して渡してゐる、受取るは無論女だ。そして右掌にその金を受取つた女が、左手に自分のスカートを………どうも暗くつてよく判らない。摺り落ちる物を揺り上す直す様な恰好をしてゐる。

そして、男がゆるやかに去るのを見送つて、女は、大膽に衣紋を直してゐる。

神よ、こゝにも私以外の人を近づけ給ふな、と祈つてゐると、女は私を見つけたのか、私の方へ近寄つて來た。

『紳士、労働者の戀を安く買はないか？』

と私に話かけるのである。

で、私はそろそろと漫歩を運んだのです。

だが、これらの事に無關心でゐられるにはどうも我々東洋人は不適當である。強ち異邦人たらずとも、東洋人はこんな事には無關心ではゐられぬ國民である。

で、私はそろそろと漫歩を運んだのである。

處が、間もなく私は自分の旅宿に歸りついてゐたのです。

で、私はそろそろと漫歩を運んだの………いや、床につきましたよ。

月が中天に………出てたかどうか。私はペロナールの味を微かに舌に感じた丈だ。

ロンドンの女の二種

一體どんな女がロンドンではかういふ商賣をして勇敢に働いてパンを得てゐるのか、といふことは誰しも知り度い關心事であるに相違ない。そこで、私は難事中の至難である彼女等からどうして本物の告白を聞き出すかについて、流石のこの明晰を誇る頭腦をも相當に悩ましたものである。

で、遂にある日の午過ぎ、ピカデリーの公道で、ふと知り合つた女の處へ遊びに行く機会を得たので、それを果すべくこれから私は出かけるのだ。

さあ、どんな哀れな話をこれから聞き出し得ることやら、私の胸は怪しく高鳴りを告げてゐる。巫女の言葉を聞きに行く人の如くにも、また、懺悔の場へ臨む坊さんの心地のやうにも、或は出戻り女房の言譯を聞く前の如うにも、やうにも、やうにも、あつたことであらう。

要するに私はその女の家を、ロンドンの東部のさる邊りに訪ふたのである。左様時刻は夜の八九時頃であつたらうか。

約束通り女は在宅してゐて、私を待つてゐたのだ。

『よくゐてくれたね』

『え、でも貴郎は紳士で偽は云はない方だと思つたので、私もちやんと約束を守つたのです。』

『それはありがたう……處で今日は早速、約束通りの一時間以内で、貴女の身の上話を、それも特に、どうして斯うなつたかを話して聞かせてくれませんか。どうか偽でない眞實を告白してほしむが。』

『それは、過日逢つた時も貴方が仰しやつてゝしたが、そんなことを聞いて何か面白いことでもあるのでせうか』

『いや、決して面白いとか何とかさういふ意味ではないので、たゞ、どうした経路を踏んでかうなつたかの眞實が聞きたいといふのみで、それは終生、私の記憶に止るだけであらうとは思ふよ。然しまたどんな機会でも、世の中の爲にならぬとも限らぬことだから、どうか眞實を聞かしてほしむ。』

『さうですか………』

女は私の眞剣な態度を見て、私の聞きたいといふ意味を理解が出来たらしく暫くは俯向いて黙つてゐたが、やがて顔を上げた。

『それでは、どういふことからお話をすればよろしいのですか』

『先づその前にお茶を一杯飲まして下さい、これは今晚の時間を消す報酬でこれはお茶代ですから取つてをいて下さい』

『まあ 嬉しい、それは本當にありがたう思いますわ』

と、私が出した、磅紙幣を素直にポケットへ收めると、直ぐ立つて茶を入れて來た。その間に室内の様様を見たのであるが、まことに簡單で無裝飾で質素で、これがこんな種類の商賣をする女の居室かと思はれる程である。決して、澤正や、林長二郎や、傳ちゃんに類する肖像等が掛つてゐないので、寧ろ不思議な位である。

『で、貴女は學校は何校まで』

『學校は小學校だけでした。でも私は村中で一番優等児でした』

『ほう………それで家は、親達は……』

『家も親も現在でも郷里にちやんとありますわ……それに、私は郷里では村一番の經濟家だと云はれました。』

『村一番の優良兒で、村一番の經濟家とは素敵な話だが、それはどういふ風にだつたのかね、聞かしてくれませんか』

『え、悦んで私は話しますわ………何しろ私の村には同級中に通ふ生徒が卅人も居ましたのに、満足に及第したのは約半分で、後の半分は落第して了つたのです』

『それで君は優等したのかね』

『いゝえ。一番私の成績が良かったのですもの』

氣の毒にこの女は普通よりも出來の悪い貧村に育つて、そんな低い標準の中でやつと成績が一番良かったことを、村一番の優良兒だと云つてゐることが知れた。無理もないが、喰ひ足りなくもある。

『では、村一番の經濟家だといふのは？』

『それは、本當に私は今も同じ調子の生活を續けてゐますのよ………第一私は學校へ行く時分にも、朝めしを普通に食べたことはありませんでしたのよ。朝は十時近い頃、晝は二時過ぎる頃、晩は八時頃でなきや、食事をしないことに定めたのです。そして夜は精々起きてゐられる限り夜遅くまで、内職をして、朝は早く起きたのです、まだその上にお惣茶等も絶対に一日に一品主義で、夜それを作ると翌朝も晝もそれを食べることにしたのです。』

『へえ……それで然し足りるかね。』

『え、足りさせるのです。』

『今もかね？』

『え、今も大體その方針ですが、どうも體が衰へたらしいので、近頃は大分それを狂はしてゐます。』

『驚いたね、それでよく體が續いたものだと思ふが、それも君一人だから出来ようが、もし他人を使つちやそれちややれないだらうと思ふね、それで、君の親達は、』

君の子供の頃には何を職業としてゐたのかね………』

『田舎の小さな鍛冶屋です。現在もさうですが、却々骨だと云れて來てゐます。昔から持つて來られる仕事だけを待つてそれを仕上げて、その収入の内でも足りなくても暮して行つてゐましたのですが、今ではそれだけちや逆もく足りないので、父も弟も病氣になつたと云つてゐますよ。だから仕方がないから職人を雇ふのですが、どうも居續かないといふことです。外の仕事をどんく取らうにも肝賢の職人が居ぬ位ですから、却々取れもせず、今では本當に私の心配の種になつて居ますの』

『ぢやあ、何かね、君がこの商賣をしてゐることは、親達も承知してゐるのだね。』

『え、最初はミシンを習つてゐるとか、何とかと云つて云ひ繕ひましたが、とうとう知れて了つてそれからは親も眼を瞑つて許してゐたのですが、今では反つて私を手頼りにする位なのです。』

『素晴らしい節約を君は實行したものだ。全く驚歎するが、それちや體を損ねる憂』

が充分あつて不安だが、も少し養生することにしてはどうだね。」

「え、でも食物に金を使つたり、人との交際に費したりするのは私は本當に嫌ひですの……」

「ぢや結局どうするのが好きなのだね」

「え、本當は相當額に迄貯金が出来たら、そろ／＼人並の眞似もしようとは思つてゐますけど」

「それで貯蓄でも出来てゐるかね」

だが貯蓄處でないらしい様子は一見して知れてはゐる。

「それがね、却々出来ないのですもの、困つて了ひます……」

果して女の答は豫期通りだ。詰り、大昔しの時代離れのした節約法や立身策に中毒されて、今の世にもこんな方法で、身の立つ時が將來に近づいて来るものと思つてゐるのだ。

「そりやね、君が無理だよ……所詮こんなことをしてゐて、詰りこの商賣に限ら

ずだね、君の親達にせよそんな程度の小仕事をしてゐてそれでそんな無理な節約だけで、却々世に出られるものではないのが今日の世間の實際なのだから、それよりもせめて、體でも悪くせぬ様に充分注意することですよ」

「え」

氣の精でか、この女も既に肺を侵されてゐるのではないかといふ疑が、強く私の頭に閃いた。となると、私はもうこれ以上、この哀れにも氣の毒な、標準の低い村一番の優良兒や、見當の違つた節約經濟の話聞いてゐる氣がしなくなつて了つたそこで、手つ取早く結末へと私の話は進めねばならなかつた。

「それで、結局何が原因でこんな商賣に身を沈めたのかね」

『ミシンの師匠に欺かれて、とう／＼揚句の果にかうなつて了つたのです。』

『いや、いろ／＼の長い時間をありがたう……もうそろ／＼約束の一時間が來さうだから、これでお話は終ひにしよう。休息をしたら、靜に稼ぎに出なさいよ。無理をしないでね。』

「え、ありがたうございます……だが、貴郎もすい分變つたことを好む人ですね私の身の上話などが、そんなにお聞きになる値打がありましたの……」

「なか／＼参考になつたよ。ちや、左様なら」

「左様なら」

女は流石に懐しさうに表近く迄私を見送つてくれた。が、私はほつと解放されたものの氣安さにゐた。

そこで、諸君大分時間も遅くはなつたが、序に、もう一軒の女の家を訪問しようこれは約束ではないから果して在宅するか、どうかは判らないが、その女が常にその居宅を根居としてゐることを私は知つてゐるから、これからそこへ行つてみることにする。

この女の家は郊外にある。

だが直ぐ判る處だかう私について来るがよろしい。此處なのだ。

燈火が點いてゐるから必ず居るに相違はないから私は案内を乞ふことにする。

蹙音がする。おう既に扉に觸れてゐる。

「まあ、よくいらつしやいましたのね」

「どうかと思ひましたが、是非今晚は貴女の話が聞きたいので私は、わざ／＼來たのですが、差支へはありませんか」

「いゝえ、すこしも支障はありません」

で私は室内へ這入つた。

その部家の調度は、實は、一見して前述の女と大分の差が見える。質素な一通りの家具と、若干の古雑誌の載つた大テーブル、古椅子ながら割合にしつかりした物四五脚、古風な取付のストーブ等の模様が、この女の人柄を告げてゐるやうだ。

私が腰を下すと女は待ち構えて口を開いた。

「どんなお話をしろとお云ひですの」

「實は是非とも貴女の身の上話を聞かしてほしむので、それもこんな身になる迄のことを聞かして呉れませんか。それからこれはお土産です。どうぞ取つてをいて下

「さい……」と、私は此處でも磅紙幣を出したのだ。

「偽札だらうて？ 失禮なことを云ふものではない。靜に傾聴するがよい。」

「有難うございます！」

口數すくなくこの女は眞から嬉しさうに受取ると、光る眼で私をちつと凝視する。

で、私は餘り美しいその眼と全體の眞面目な感じに、幾分相手の職業を忘れ氣味だつたが、やつと氣を取直した。

「どうか本當の事を聞かして下さいよ。そこで貴女はかうなるまでは……」

「女學校を出ると直ぐ、シヨツプガールに出ました。そしてずつと勤めを続けてみましたの。」

「ふう、それがどうしてこの商賣へ轉じたのですか。その動機は？」

「男ですの、悪い男に欺かれて同棲した末に、私が妊娠すると直ぐ私を棄て、アメリカへ行つて了つたのです。」

「ふう、その男といふのは貴女とどういふ關係で知り合つたのです」

「それは同じ店に勤めてゐた會計係り男のだつたのです。」

「で、子供さんは」

「この家に育てゝゐます」

「それを何もかも貴女の親達は知つてゐられるのですか？」

「いゝえ、とんでもない。親達は私が何處で何をしてゐるのか全然知らないでゐますの……でも親達の動靜は私はちゃんと知つて居りますわ。それは人を頼んで調査して報告させるのです。蔭乍ら案じて何時か親に謝罪の機會を待つて居ります。」

「で、貴女はこの生活から脱けようといふ氣はありませんか」

「脱けたいといふ心地は充分ありますが、希望だけちやどうにもならぬ現實が、私を更に強くこの職業に曳きつけて了ふのです……それに子供は大きくなりまするし、金は益々かゝるので。それなのに女手一つでこれだけの生活の維持のできる職業は何處にもありませんもの……若しあれば、きつとそれは隠れてやはり

この種の事を忍ばせられる破目になります。それよりも、斯うして薩張り^{さつかり}と後腐れなく取引としてこの商賣をしてゐる方が、寧ろ氣樂だと私は思つてゐます。』

『子供さんは眠^ねんでるのでせうね』

『え、彼方に』と女は背後の扉の方をちらと眺めやつた。

『では、誰でも客にして呉れるのですか？』

『え、』と上げた眼は淋^{しみ}し氣だ『しかたありません、取引だと諦^{あきら}めてゐます。』

『では、この次に私が改めて貴女の客として來た時にも、快く貴女は泊めて呉れるでせうね！』

私は半の眞實と、半の試^あし心で女の眼を視入^{みい}つて問ふてみた。

女も私の眼をちつと視守つてゐたが、つと視線^{しせん}を膝に落して了つた。

『貴郎は不可ません。さうして汚したくありません。そしてどうか私に清い追憶^{おぼえ}の人として残^{のこ}つてゐて下さい。』

『さうですか、それは淋^{しみ}しい幸福ですな』

『え、でも………どうか客^{きゃく}としては被居^{かゐ}やらないで下さいます様願ひます………それに、貴郎のやうな方が私の處へ客として來られますと、私の心の安靜^{あんせい}を破られますもの！』

『といふと………』

『貴郎は客らしき客として、取引の客として私には待遇^{たいぐ}しかねるのが恐ろしいのですもの………私はもつとく遊蕩兒^{うどうに}や不親切^{ふしんせつ}や薄情^{はくじやう}な男達ばかりを相手にしてゐたのです………どうかお解^{わか}り下さいね！』

『いや、ありがたう、私は一生貴女の幸福^{かひやく}を祈つて已みませんよ………ではもう歸ることにします』

『本當に何のお構^{かま}ひも出來ませんで』

『それでは……』

と私が腰を上げた時、隣室^{りんしつ}から嬰兒^{えいに}の泣き聲^{なみこゑ}が激しい調子で洩れて來た。

女はちらと扉を見たが、黙つてゐる。遠慮^{えんりょ}してゐるのであらうと思ふと、私は

「いゝんですか、泣かせた儘で？」と問ふてみた。

「え、よろしいのです。婆やが附いて居りますから……」

「あゝ、さうでしたか、では、御機嫌よう。それからその子供さんがどうぞお母さんに甘えられます様祈つてゐますよ！」

「はい、ありがたうムいます。本當にありがたうムいます……どうぞ、貴郎も御無事で御暮し下さいませ様祈ります。祈ります……」

「左様なら」

外部へ出た時に、子供の聲は既に泣きやんでゐた。

立つて見送る女の姿を振り返り乍ら、私は何とも云へぬ澄み切つた心地で夜更けの郊外を程近い地下鐵の驛へ向いて歩いたのだ。

さてこれで私は旅宿へ歸つて寝ればよいのだが、その前に諸君に一言云つてをき度いのは、大概のピカデリーやリージェントへ出る女達はこの二種類以外の者は、どれも似たやうな娼婦型の婦人が多いといふことだ。

これだけを知つたら、いよくそのどれを選び取るかは隨意といふものだが、さて今夜はどうも疲れてゐる上に、眠くもあるからこれで私は歸ることとする。物足らなさうな面地の諸君だ。勝手にそこらをうろつき給へ。ぢやお眠み。

女子同性愛の家

私の旅も大分日を重ね、こゝに獨逸入りをすることゝなつた。で、先づ訪ねばならぬ所は、それは非常に多くある。實際の廣い私の事であり、知り度いことの多い新しい土地に於けるだけあつて、その順序と訪問先を定めるのに迷はねばならなかつた。

結局、私はYといふお醫者さんの友人の處を先づ第一に訪問することゝした譯である。

何を話したか？そんなことは發表の限りではないので、兎に角私達二人は久し振りで相逢ふた嬉しさに、子供浸みた燥やぎ方をして街の舗道を逍遙したのだ。

『そこで、寺尾、大分君も異國風になれたらしいが、でもこのドイツは大分英米邊りと調子が違ふんだ……知つてゐるかい？』

『いゝや、何しろまだホテルへトランクを放り込んだ儘で、いの一に此處に來たのだからね』

『ふゝん、それぢや何ぼ何でもまだ實驗がすまないも無理はない。よし、それぢや

日頃の蘊蓄を傾けて君を指導しようかね。』

『大いに頼む。何よりも先づそれが第一の仕事だから……』

『正直に申上げなくも大抵は判つてゐるから……だがまだすこし時間が早過ぎるのだが、と、まてよ何處か時間潰しになつて、見學の目的の達しられる所といふのは……よしいゝ處がある行かう』

『兎に角一任したから頼む、一通り指導を受ければ、後は獨立獨歩で大いに一人前の男子らしく振舞ふから』

『うふ……それに君は頭がいゝから』

といふ譯で私はこゝに曳かれて行つたのが細な一軒のカフェーだつた。

で私は頗る張合がない。

『おい、こんな處へ連れて來て、これがドイツ入國第一の見學地としての價値があるんかね』

『黙つてついてらつしやい。判りもしない辯に……』

『それより他に仕方がないから我慢する』

カフェーの内部は、高々四五組の卓子しか用意はない。室内の調度も重苦しい感じの物だ。客はたつた一人の女が何か飲んでゐる。私はその女を見ると直ぐ、これが商賣女だなど積る経験から推して判断してゐた。

だが、飲物が私等の前に出されて、それを飲んでゐる間も私は注意をしてゐたが一向この女は私等を、いやYはどうせ顧られさうな男ではないが、第一この私を振向かうともしない。私は意地になつて女の動作に注目してゐた。

『おい、いくら見たつて、ありや商賣女ぢやないのだけ。』

『さうか』

『ふゝゝゝ普通の婦人だよ、職業婦人さ』

『へえ………』

私は何か斯ら物足りぬ思で、もうその女のことを諦めてYの方を注意してゐた。何があるのだらう、こんな平凡な陰気なカフェーにどれだけのことがあるのだら

う、そろ／＼私は輕侮をさへ覺へてゐた。

と、その時入り口のカーテンがさつと分けられて、一人の華奢な姿の男がいつて來ると、すぐその女を發見して微笑を投げると、『女の卓子へ急ぎ足に行つて腰を下して了つた。』

『おい』Yは私に合圖をしてゐる。『あれね、今來た方の男は、ありや女だよ。そして前からゐるのも女だぜ。即ち女同志』

『女同志？』

『さう、同性愛だ………今に何か始まるかも知れないから、素知らん振をして氣をつけてゐ給へ。』

『さうか、そんな家なのかこれが………』

私ははじめてこの家がさうした機關と知つて、更めて何となく見直す思がした。泥草蛙で踏んがけて一と休みした野路の地藏堂で、案外な由來話を聞かされたやうな心地だ。ありがたさだ。これでこそ遙々ドイツくんだりまでも來た甲斐ありと

云つべしだ。

一一八

Yは澄した顔でターゲプラットの社會面を見る振をしてゐる。だが唇邊に笑が覗いてゐるからは、これは新聞を讀んでゐるのでない證據だ。そこで、私も何か彼に倣はねばならぬが、相憎雜誌やヴォツへの類は女の卓子に載つてゐる。で仕方なしに繪の少いドイツエツアイトウングを取り上げた。ちやんと眞直ぐに、決して逆様に持つたのではないから安心してくれ給へ。

で、七分三分に私達は二人の女と新聞とを見別けてゐた。

が、却々何事もはじまりさうでない。たゞ話の模様はかなり熱を帯びてゐるらしいだけだ。でも、不忍池の蓮の開くのを麻布から毎朝見に行つたといふ祖父への義理もあるので、一生懸命にこれ位の辛抱はせねばならぬと、ちつと神妙に私は時節到來を待つてゐた。

でも、Yは本當に新聞を讀んでもゐるらしく、ばさ／＼と音立てゝは紙面を繰つてゐる。

と、始つたのである。諸君、斷然に凄エ光景になつたのである。

男裝の女性は、女裝の女性を……やゝつこしい云ひ方だな。文撰、植字、校正で間違えなきやいゝが、若し誤植でもやられると滅茶苦茶だ……そんなことより光景は益々進展して行つてゐる。今や男裝の女性は女裝の女性を、やれ／＼やゝつこしい、その女性を膝に抱いてキツスしてゐるではないか。實に變な氣持のする場面である。

これで澤山なのである。

外部は宵の口の清らかな空の下に、空氣は澄み渡つてゐる。二人は蒸風呂から出たやうな氣分で、御互の顔を見合つたものだ。

『どうだい大家、これには小々參つた形だらう。恐らくこんな變な専門の機關を持つた都市のあるのはドイツだけだといふことだが、それとも君は今日迄の遍歴の間に何國かで見ることがあるかね』

『さうや、なうよ。初見參だ』

一一九

『さあ、それぢや時刻もよしと、そろ／＼指導に着手するかね。』

『うん、追に腰を据えて研究してゐるだけのことはあるね、感心した。』

『妙な賞め方をするなよ。まだこの外に男性の同性愛のカフェーもあるが、どうだい、刷毛序でに廻つてみるかい。』

『廻るつて、何か室内等に異色があるといふのかね。』

『いや、大體は今のカフェーと同じ様なものだが。』

『それぢや、もうよいとしてをかう』

『よし、では出かけよう。』

諸君よ、聞かれたか。實にも怪しき事どもにこそだ。

獨逸女の呼び方

『さあ何處へこんどは行かうと云ふんだ』

『いや、これ以上何處へも行きやしないよこれでいゝのだ』

『何だ此處か？』

『うん、そら来た。處が君はドイツの商賣女の見別けがつくかい。ロンドンの如うにあゝけばくしくしてゐないのが特徴だが、今、向方から来る女でどれがさうだが試してみるといゝよ』

『向方から……』

云はれる儘に向方を見ると、四人程の女が此方へ来つゝある。その内の二人は見間違ひのない世話女房の古いのである。處が他の二人中の一人は、どう見ても、病人らしい。すると残りの一人は廿才位の小柄の一寸した女だが、地味過ぎる位の普通の服装で、足早に歩いてゐる。先づオフィス歸りの女事務員に相違ないのだ。この四人の外には、まだ話題に上す程接近した場所に女がゐない。

『さあ、早く指定してみたまへ。商賣女が居るか否か、居ればどれがさうか』

『居ないね、どれもさうとは見えぬよ』

『駄目々々。あの三番目に來る小柄な、オフィスガアル然としたのがさうだ。』

『すこし後をつければ直ぐ判るさ……まあ行交つてから立證してみせるよ』

『さうかな……』

私は判信半疑でゐた。

だが、その女と行交つてからが直ぐくると向をかえたので、私もそれに従つた行くこと一町程で、私達の前を行く女の前面へ、一人の若い男の此方へ來る姿が現はれた。

『そら、いゝか、見てゐたまへ、いま眼前に證が立つから』

Yはずつと視線を止めてゐる。

で、私もそれを見てゐると、女の前へ近寄つた若い男は、摺れ違はうとした時にひよいと帽子を取つて軽く女に會釋をして、行過ぎ乍ら女の方を振返つた。すると女も振返つてゐた。

『そら、女が應じてゐる!』

Yの聲の終らぬ裡に、その女は路を右へ曲つて急に歩調を落した、すると男もそれを見て廻れ右をすると女の後を追ふて右へ曲つて行つた。それが直ぐ女に追付いて並んで歩いてゐるのが、並木越しに私達に明瞭に見えてゐる。

Yは又廻れ右をして元の方向へ歩きだした。

『どうだね、あれがさうだらう』

『ふう、正に間違なしだね……だが、帽子を取つて會釋をするのは、一寸變つてゐるね』

『大抵ドイツではあの方法らしいよ。あれが一番簡單で間違がなく判りいゝ呼び方となつてゐるね。それに、あゝして呼びかけたり應じたりしてゐるのを、割に通行人も氣にせずに見過してゐるからいゝよ』

『批難しないかね』

『批難もあるだらうが、大體が歐洲大戰後のドイツの國情が酷いものだから、この疲

弊した國の内にあつては、さう馬鹿々々しく固苦しいことばかりも云つてはゐられまいぢやないか。』

『うっかりドイツぢや帽子を脱げない譯だな』

『うん、ドイツだけぢやないノールウェー、デンマーク、オランダ邊りでもやはりこの方法らしいから、その意味でなら、やはり脱帽には注意を要することになる。』
『ほう、さうか』

『これで、僕は君に女色見學上の方法論の概要を教授し終つたことになる。だから後は君自身の努力と發見に俟つことにするかな』

『よろしい、それでは今後は私自身の創意で行くとしよう』
處はドイツのベルリンである。何と諸君よ女色見學もたゞ無暗には出来ぬものだといふことが判らう。

そぞろ敬順の意が動くでせう! さうだらう……何、脱帽する、いやそれには及びません。脱帽は、銀座で、新宿で、道頓堀で……

どうか機械人形の如くに盛んにやつてくれ給へ。ね、脱いだり、被つたり、脱いだり、被つたり……。

ビクトリア日本人居留地

内地の本社へ、本省へ、本廳へ、母校へ、大急ぎでレポートを認めると、時計を出して見る。そろ／＼仕度にかゝる、そして出かけるといふカフェー、日本人のきつと行くカフェーへ連れて行くからと云ふからの電話で、私自身の豫定を變更して今日も又彼の来るのを待つてゐる私だ。

さても迫る宵暗みは氣障にも惱みを植えて行く……そろ／＼キティを思ひ出し、ロンドンの女を思ひ出し、日本中の女を思ひ出し、果は世界中の生殖器の大きさを算出してみたくなる時刻になつて、やつとYはのそり東洋的歩調ではいつて來た。

『仕度はいゝのかい』

『これでいゝだらう。高々カフェーへ行く位に。』

『それでもいゝさ。だがね、あのカフェーへ行くと日本人の誰と出會すかも知れないのだからね、それさへ承知ならいゝ』

『何だ頗る大袈裟だね……いゝよこれで』

何も西藏國王やマホメット大僧正に謁見を仰せつかる程の身に覺えがあるぢやな

しと、私は例の平常着で行くことにした。まさか無作法といふお叱りも蒙りはしない。これで無作法といはれるなら、私の祖母などは御手討者だつたらう。如何なる人をも出迎えたことがなかつた位い、完全に腰が抜けてゐたものだ。

ベルリンのビクトリア・ルイゼプラツ町は直ぐ近かつた。そのビクトリアカフェーの前で、Yは立止ると、この歴史的な家屋の説明をしてくれた。

『これがビクトリア大學であり、ビクトリア政廳であり、ビクトリア省であり、ビクトリア陸海軍省であり、ビクトリア研究室であるのであつて、而して、ビクトリア日本人居留地なのもあるよ』

『逆も、それが一遍に記憶できれば、親の云ふことを斯うも忘れはしなかつたよ……澤山だ』

『兎に角、こゝで留學生や官省會社の派遣員が、その目的要務を遂行し研究するんだから豪いもんだらう。さあ遣入らう。』

家の中はかなり廣い。その廣い場所に八分の席を占めるのが日本人なのは、一

歩踏み込んだ私は驚いて了つた。

『なる程こりや素晴らしい盛況だね、有色人種が我々の外に居るぢやないか。』

『うん、あれは印度、安南其他の人達だらうよ。』

『宛然東洋人大會場だ』

見渡す周圍に軍人あり會社員らしきあり、醫者らしきあり學生臭きあり、兎にも角にもそれが皆日本人なのは意を強くするに足ると共に、我が女色調査事業上に斯る有力なる競争者のあるを知つては私は一大發奮せざるを得ないのである。

『このカフェーへ出入りする女群は、大抵日本語の單語を知つた奴が多いのを見ても日本人がどれ位多く接觸してゐるか知れるよ。きつと今に此方へも来るから、來たら捉えて喋らせてみせるよ。』

『此處だなあ、いろ／＼日本へも土産話の作られる家は……此處の仕入れなのだらう、獨逸賢婦人として家庭教師や何かといふ名目で、お歴々が日本へ連れ歸つてはゴシツプ種を播くのはね。』

『さうさ、あの女等は日本のプロフェツサーや海陸軍の軍人や實業家の名刺を澤山貯えてゐて、一々それから取つた金額迄も記入して居るのだから愉快ぢやないか……どうだ、御親類になるかい』

『いや、どういたしまして、外國に永住するならばだが、さもなくしてそんなことをしてをくと、歸朝後にそれ等の人々に對して尊敬の念が薄らぐと困るから、先づ私は止めにしてをくよ。』

『おう來た〜。』

Yは私に知らせると共に、何か向方に居る女に合圖をした。

すると女は早速私達の卓子へやつて來た。

『これがやはり有名な方の淑女の一人だよ。今君に挨拶をさせるから決して馬鹿笑ひしちや不可いよ。』

と、Yは女に獨逸語で何か云つてゐた。すると女はにつこり朗かに笑ふと、私の方へ親しみの眼差を投げて

『ドウ、イスト、ゼール、スケベイー（貴郎は大助平だ！）』と云ふのだ。
『冗談ぢやない、ね』

私は呆れて顔を見てゐると、女は得意になつて更に語を繼いだ。

『ネーメン、ジイ、マイネン、ダンコン』

と囀つて前の菓子皿を私の方へ押したものだ。

『おい何だい今のは』とYに訊ねると、Yはくすくす笑ひだした。

『はゝゝゝ、誰か又教へたな。ダンコンだよダンコンだよ。そいつを菓子の園子にもちらせて教へたのだらうが、罪な洒落をやつたものだ』

『はゝゝゝ』

そこで私は、何も知らぬ女の好意に免じて、ダンコン洋菓子を一つ、今更男子の身を以つて忝くも頂戴仕らねばならなかつたのである。

諸君、判りますか。頭が悪くなくとも、かういふ歐羅巴先進國に於ける尖端的シ
イツクな話は、諸君には判るまいから、下手に考へるよりは、直ぐ銀座か何處かで

森永、明治、壺屋、風月等々で一九三一年型洋菓子ダンコン在りやと問ふがよろしい。

必ず判るかつて？

たぶん十中八九は解る筈であるとは思ふが、若し不幸それだけで解らずば、左様である。

これは町内の洗湯の親爺に聞くがよからう。

素人女しらひとんなで繁昌はんじやうする家いへ

今日からは私の單純行動である。そこで私はこれから中以下の人の住宅の多い方面へ行動することにする。

餘り立派ぢやないですな。この周圍の家々の生活の程が判りますね。この邊に住む女はベルリン中心地の、商店や會社に殆んど悉くが勤めてゐる勤勞階級です。

おつと行き過ぎては不可ないが、其處の板塀の角の處に貼つてあるエナメル板は何と書いてあるかな？暗いが、でも讀める……ブルーインストリート、おう此處だ。

處で十番だから、右の方かな、それとも左かな……何あんだ、彼處に看板が見えてゐる。そらネオン燈で、レンデンス、カシノ。

陽氣ですね、ダンスホールは道にね。

此處はですな、そのこの附近の勤勞階級の娘さん達が、踊る爲やら、男欲しさからやつて來る家なので、それで繁昌してゐる家ですよ。商賣女が？そりや來ますよほんのすこしは來ますね。きつと今夜でも五人や八人は來てゐることです。

だが、残念乍らどれがさうだか私には判らない。

え、此處は一寸メリケンのキャバレーに似てゐますよ。奥の方にはカウンターがあつて酒場になつてゐますね。

さあ、この邊へ席につきませうかな。

あ、あれ、あの女ですか、首から箱を下げて何か賣つてゐる女でせう、ありや煙草や菓子を賣り歩く女です。

ほう、この電話ですか……え、これは、さうですこれはですな、その各テーブル間の通話に用ひるので、向方の人と此方の人とがこの電話で「踊りませうか」とか何とか相談をするに用ひるものですよ。

初めてにしちや大變好く知つてゐるなアですつて……そんな失禮なことを云ふものぢやありませんよ。

さて、私もそんな説明ばかりしてゐちや、すこしも面白くないですね。大いに意義あらしめるべく、わざわざ來たブルーインストリートですからね。

おや、素晴らしい美人ですねありや！伴れの女はみませんね。これは美人ですね……元來がこのホールは素人女の來る處ですからね、どうも美人の数は多くないですよ。

ほう、あの席へつきましたよ。

やつてみませう、試しにね。素人女なら知らん顔をしてゐますよ、見知らぬ男の合圖になんか應じるものですか。

かうコツプを上げて……は、あ此方を見ましたね、おや合圖に應じてゐますね！うゝ、こりや不可ない……折角のあの美人はありや商賣女ですよ！うゝ残念ですね。

いゝぢやないかですつて？

いや不可ませんよ。第一私は今夜この家にて大いに素人女と意義ありたく参つたのですよ。それにも不關、商賣女は相手に出來ませんね……こりや困つた。

構はず地下室へ下つてビールでも飲みに行つて了ひませう。女の方で諦めるでせ

うよ。

すい分この地下室にも居りますね。

うゝぬ……追にビールは何處のも美味いですね……盛んに踊つてゐますね。愉快ですな。

おや？上にゐたあの女が、また地下へ來ましたね、これは……

いよゝ／＼どうも不快なことになりましたよ……憂さいですね。卅六計で、こんどは二階へ行つちまませう……はゝゝ。

やれ／＼、此處ならば地階を見下してゐて清々として愉快ですな……踊りの全面が見えて愉快ですね。

あれ、あれを御覽なさい……これは猛烈だ。踊りにかこつけてネックしてゐるな、さあ、斷然卅一年型ですね、凄いですね。

愉快さうですね、御互に思ひ思ひの人を得て、相抱いて踊り抜き、渴けばビールで軽い酔を買ふなんかは、逆もモダンですね。

私も踊り度くなりますね……あは、あは、あは。愉快々々、うーる、あ、愉快ですねい、心地ですよ、實にいい気分で……え、？な何です、わッ！又來ましたか。これは不可い、折角の気分が……おや、いよ／＼肉迫して來ましたぞ！さあ、不可い。金輪際、今夜は商賣女は絶対拒絶します……おつと、一寸そこを通して下さい。おや失禮しました、酒がこぼれましたか。これは、これは、何しろ、そのちと慌て……いや急用でして。

わッ、不可い。一寸御免！ すこし通して下さい。何をくそつ捉まるものかだ！ やれ／＼息の切れること……おや、諸君は？ 何ですあの女を……いや絶対今夜は素人女をといふ立前からも断然御断りですよ。

やれ／＼、さあ失禮ませうかね。では、又明日……え、どうも憂さいですなそれ程、御氣掛りなら諸君どうか御自分でして呉れ給へ。や、左様なら。

ハンブルグの酔と女

諸君、想像してくれ給へ。

今私の居るのはハンブルグの市の境に近い所にある、上品な酒場で踊場を兼た家だ、踊り場だけでもさう日本の百疊敷の大廣間だけは充分にある。

處で、その裝飾や調度がまた素敵なものだから。油紙の造花を矢鱈に下げたり挿したりしたコンクリート床の日本のカフェー等とは全然桁が違つてゐるのだから詳しいことは、まあ歸朝してから、この寫眞を見せ乍らゆつくり話とするが、でも一通りは知つといて呉れ給へ。でないと話に實が入らないからね。

で、その裝飾はジャズと舞踊とに相應しい色彩で燃えてゐるといふものだ。第一この床、私のこの踏で踏む床が、緋と青との花模様素晴らしい絨緞が數き詰めてある……その上を花と蝶の如やうに、ひらくと男女が踊つてゐるんだから、まあ殆んど夢幻的な感じが出てゐる。

その光景を眺め乍ら飲むこの酒場は、この家の右手奥の方に當つてゐる。こゝのバーテンダーがまたこれが素敵なお物だ………玄人素人を混せて今夜來てゐ

る四百人程の客の中でも、どうしてどうして目立つた美しい顔立だから、酒は猶旨いと云ふものさ。

また誰かシャンパンを抜いた客がゐるよ。景氣の好い音をさしたが、結局こんな處でシャンパン等を抜く者は、金をかけて田舎者の廣告をしてゐるやうなものさ。要するに愚な話だ。

だが諸君、よく世人は獨逸女の悪口を云ふのを聞くだらう………私も無論聞いてゐる。だが、そんな悪口ばかりを云ふ人間に、今のこの家の内部を見せてやり度いものさ。

どうして斯うも美しい獨逸女が集つたものだと思へて、私でさへ不思議でならぬ位だ。

本當に見せてやり度いものだよ。科學々々つて云ふが、科學の力もまだ幼稚なものだね、この盛觀を一目でも直ぐ諸君に見せるといふことが、まだ出来ないんだからね。私はかういふ意味からも科學の進歩を促進したいものだね。テレビジョン

の實用化なんかは差詰めいの一番に完成さしたいものだ。

そしたら、考ても見るがい。こゝで知り合つた女のその後の無事な顔を他國に居ながらこれを再び眺めることができて安心でもあり、慰めともなる譯だ。そして、現在斯うして私が飲んでゐる光景なども、母國のスクリーンに映るといふことになると、大いに寺尾の洋行も廣く世間に知られる譯なんだが……その代り拙い場合もあるにはあるね。

そうさな、そんな時はどうするかね、幕を顔の處へ下げることにするか……それで拙ければだね、それで拙ければ、そうさな……しかたがない私は眼を塞ぐよ。さうすりや、何にも見えないから一番安心だらう。

盛んに商賣女が活躍してゐるよ。

ほう、天井から放射する五色の光線が廻轉するので、どうだ、眞の煙が紫の渦となつて舞つてゐる、實に綺麗だね、まるで夢の世界だね。

眞に歡樂境といふものだよ。

時にもう午前二時になるが、實は私は先刻、一人の美しい眞賣子の女に一寸モーションして約束したのだが……齡は先づ廿才だらうかね、非常に可愛い綺麗な顔をしてゐる娘だ。おう彼所に居るが、さて、約束の時間は三時過ぎだから、まだ一時間ある勘定だ。さて……待つ身の辛さは洋の東西を問はぬといふことを切實に痛感したよ。

それよりも、後の一時間中に私は酔ひ潰れるやうなことがあつちや……折角の機會を臺なしにしなきやならんぞ。とは云へ、この幸福なる夜をこれ切りで酒なくも過されずと、さてさて戀する者は憂きことの多き物かはだ。

おや、一つ二つ三つ目の私の右の卓子。

いくら勘定してみせても見えないのだから頗る張合のない話だが、廿二三の大變上品な美人がそのテーブルについたが、はて、おかしい。何時の間に來たのだらうか。全然氣がつかなくかつたが……。

これは艶な姿だ！

「不可ない！私は大分酔つてゐる……。これでは眞實娘に對して甚だ節操を欠くことになるが……さうだ、あの娘を待つ間の時間潰しに、三番目のテーブルのダミーに一番相手になつて貰ふこと、しよう。單にそれだけの意味に於てだ、限界を嚴重に守ることを、私は紳士の名に於て誓はう。」

さうと定れば、もう躊躇する場合でなし、早速ウエーターを利用してやらう。チツプもはづむことに覺悟する。

で、諸君、残念乍らちと遠慮してほしいですな。いづれ経過は報告しますから……占めた。女は承諾の意を示したぞ。さあ、いよく此方へ來るぞ！

「やあ、どうぞ……酒を召上りますか」

「貴郎が召上りますなら私も戴きます」

「や、私は大いに祝福する意味に於て、飲みたいものです。飲むことを希望します」
「では、私も戴きます」

「で、貴女はお一人ですか……さうですか、それはお淋しいでせう。私も誰も友人

がないので實は先刻から非常に淋しかつたのですが、貴女を得て大いに愉快になりましたよ。もつと召上りませんか」

「私はもう酔つてゐますから此以上は駄目です、」

「私も俄然酔ひました。斷然陶酔の域に達しましたね」

「まだ上るのですか？」

「いや、もう止めませう」

「では、酒を止めて早く外へ出ませう」

「外へ？ 出ます！ 出ますとも！」

で、諸君、諸君は遠慮して呉れ給へよ。いづれ経過は報告するから、ね。

「ど、何處へ参りますかね。」

「何處でもよろしいではありませんか……」

「いや大きに御尤もです……では参りませう、どうも、いや大きに酔つたですな。」

「さ、早く行きませう……」

「は、参りますよ。愉快ですな……」

「これに乗つて行くのです」

「さうですか、やれ／＼運轉手御苦勞だね……どうも、これは素敵に酔つたらしいぞ」

「おう苦しい私も大變酔ひました……膝にもたれさせて下さい」

「ど、どうぞ……」

で、諸君、諸君は遠慮して呉れ給へよ、いづれ経過は報告するから、ね。

「貴女、貴女は幾何でよいのですか。」

「え？ お金なんか要りませんよ……黙つて私の宅迄いらつしやい、一緒に來ればいゝんです」

「そ、それは恐縮ですなあ……」

「私の體が下に沁るぢやありませんか、もつと確固りと抱いて下さいよ」

「これは失禮しました……」

「おや車が停つたやうだが……」

「え、此處でいゝのよ。さあ降りませう」

「何處です……これは淋しい住宅地ですね、此處が貴女の住居ですか。誰か人が？」

「いゝえ、誰もいませんのよ……爺さんは一週間に一度宛しか來ないのだから心配は要りません……さあ靜かにして下さい。部屋へ這入つて了ふ迄は決して一言も口を聞いちや不可ませんよ。ね、此處はアパートですからね。いゝですか！」

「承、承知しました大丈夫です」

で、諸君、諸君は遠慮して呉れ給へよ、いづれ経過は報告するから、ね……

「さあ、おかけなさい。此處は私一人の住居ですから、もう誰にも遠慮は要りませんよ。」

「はあ……。これは豪奢な住居ですな、おう酒、酒がありますね。」

「ほゝゝゝ、まだ上るの？ 召上るなら取つて上げますわ。」

「私はね貴郎の名も聞かねば、私の名も告げません、それでいゝでせう……そして

毎週の今日期うして遊ぶことにしませうよ、御承諾ですか？」

『結構です。う——の　どうも酒も話も何もかも結構ですな……もう日本へ歸らなくとも結構ですな』

『さあ貴郎、此方へいらつしやい！』

で、で、諸君、諸君は遠慮して呉れ給へよ、いづれ経過は報告するから、ね……で、諸君、諸君は遠……諸君はまだ遠慮をして呉れなかつたのかね！で、ではもうよろしい！その代りこれ切り報告も話も、もう止めだ！

二千年の昔を今に活す

何しろ二千年の昔を、今活して見せようといふのであるから、讀む諸君も骨が折れることは當然と云はねばならぬ。

であるから、諸君はこの章の話を、どういふ風に繼ぎ合して一幅の物語りとすることも諸君の自由であるし、どう切り放して考へ耽つてみることも諸君の好き勝手である。

でも、さうでもしなければ、逆も二千年前のボンベイ享樂振の「昔を今に爲すよしもがな」

いよいよ難曲、ボンベイの型の章始リイ……。

伊太利の博物館にあつたボンベイの遊廊の壁畫が、ムツソリニに依つてソツクリ公開を禁止されました。それを寫眞帳にしてコツソリ賣る店がありますよ。そしてその店の親爺は變り者でムツソリしてゐるか、どうかそこ迄はハツキリ判りません。

ネーブルの銀座通りと呼ばれる所がありましたつけ。こいつを誤植して銀座のネーブルとやると、臺灣のバナ、に似て食欲を咬るさうですが……

そんな譯からでせう、性慾を咬る家が、ネーブルのアーケードの附近にあります。マカロニだけが名物だと思つちや不可ません。臺灣のバナ、のネーブルの銀座がパロツオ・クリスタロといふ三階建の家なのですからねえ。大したものでせうが！或は大したものでないでせうが！

『ダンスを見に来た』で『お上りない』となるのです。花は紅、柳は緑ですね。詰りどうしても人間はケチな料簡のものですからね、とう／＼三階迄上げられましたのですよ。家の高いのも自慢したいのですな。

一二が四十疊と退窟紛れに廣さを勘定したりなんかする閑はたぶんないでせう、處で室内は華麗です。何ほマカロニでもカレーではないし、家令はムツソリニの

傍に立つて出かゝる瓦斯を括扼筋で抑えて澁面作つてゐるのがさうですよ。間違えるなかれ。

で、華麗なのですから、緋、緋、緋、緋で絨緞、緞子、ピロード、窓掛で、鏡で數百燭光の電燈です。

『百リラ出すとポンペイの遊廊の壁畫の』ですが、それが畫だから生きてないのは當然ですよ。『だから型を實演して見せます』さ。

錢勘定は『五十リラのもあれば二十五リラのもあります』とも。だから『どんな型でも見せますが』どうも私は計算下手で、よく判り兼ねますよ。諸君は御解りですか。

お解りですか？ 解らない？ しつかりしなくちや！

『いろ／＼な道具の』『説明をします』けれどそれも解らないと困りますね。

さて、いよくそれからですが。

『四人の女が出て来るのです』よ『眞ッ裸』にするには及びませんとも。

そして、『一人の女』『の手に木製の』……一寸待つて下さい。私の知人にうんどんよりそばがうまいと訛る地方人がゐますよ。滑稽ですよ。それを幼児が眞似たですな。食べ物の一つをみて『だんこん』といふので笑ひましたが、それは『手に持つてゐる』のですよ。團子のことでしたがね。ははは ゑ？ 面白くないですか。はあ、さうですか。

處でその木製ですが、詰り金でない石でないむろん團子の『だんこん』なんかぢやないですよ。木ですとも。で『二人の女』が何處の御方ですか？ それはまるつ

きり知りませんですよ。二人『の間に』ですか？さあ……どうして、こゝで『丸い臺の上へ乗り』ますのですか？はあ、それを何かに『用ひ』るのですか、さうですか、さうですか。

『これがローマの古式です』なんて云つてまだその外にも『幾通りも見せます』か。それがみんな臺灣バナ、のその『素晴らしい裸體美を發揮して』食慾を咬るんですね。たまりませんね！

で、とう／＼『男と女と二人が出て来て』いよく、名物のマカロニ食ひを『本當に實演をして見せる』のですが、『その後で紀念の爲に』マカロニを『觸らせるのです。』へえ！

で、一番お終ひにどの女が氣に入つたかと云つてやい／＼と進めに來るのださう

です。どうも話が變ですね、辻褄が合ひませんか？それはどうも不思議ですね……。ちや、もう外へ出ることにしますか。

お解りでしたか？ 解らない？ ゑゑい、勝手にしろ！

水みづ
に
う
つ
ら
ふ
影かげ

ゴンドラ、船唄、豎琴、マンドリン、ゴンドラ、女、水の都ベニスだ。

世界的の遊散地ベニスを訪ねずにくことは私の使命がこれを許さない。私にすこしの怠慢があつても私は母國に入ることゝ恥るだらう。何故と云ふに、私は重大な母國の信頼を背負つてゐるのだから、でありますね。

で、私はこの使命の重大性によつて、今夜も疲れた體軀を起してこれから出かけるのである。だが私はそれを決して苦痛と感ぜない、苦痛と感ぜぬのみか一切を私は祖國の名に於いて、寧ろこの苦痛を享樂できるまでに、自己を鍛練なし得てゐるのである。

女色調べの重き使命を擔ふ我、いざ街に行かん！

で、道案内に宿のボーイ一名を卒具して、勇ましくも外部へ出た。

『紳士、どちらから先に行かれますか』

『第一にベニスの一番の繁華地、それからカフェー……それから、まあ追々頼むこととする』

『はい。一番の繁華地はセント、マルコの廣場です。はい、この直ぐ先です。』
『寺でもあるのか』

『はい、有名な寺院があります。此處が左様です。晝ならば此邊に澤山遊ぶ鳩の愛らしいのがをりますが』

『鳩？ 鳩はまあよろしい。』

『お土産をお買ひになるのでしたら、この兩側の家が左様でありますか……』
『まあ所在が判れば、今直ぐ買はなくもよろしい。』

『はい。ではこの附近にカフェーがあります。澤山ありますがおはいりになりますか……』

『うゝ、ま、待つてくれ。おや、例によつてホテルがあるが、これは旅行者用のホテルではあるまいね』

『はい……』

『笑つてゐるが、では女の稼ぐ場所か』

『はい』

『高いのか、この邊の女は』

『いゝえ大抵ホテルが二十五リラ、女が五十リラ位いが相場です。』

『さうか、もつとこの種の女の出る場所があるだらうが、其處へ案内してくれないか』

『はい、こちらから参りませう』

『何だ酔く曲りくねるぢやないか』

『はい、もうすぐです。この突當りがさうです。カーレド・グリーン・アルメニーといふ町名であります。』

『ほう、此處がかい……この家は何だミス・エレザといふのか。』

『はい……やはり女の居る家であります』

『さうか、どうだ君の知つた家ぢやないのか……知つてゐるのなら案内しないか。これは今晚のお禮だ、取つてをいてくれ。』

『はい……どうもありがたうムります。では私が今、この家のお女將に交渉しますから、一寸御待下さいませう様』

『あゝ』

『どうぞお二階へお上り下さい……ポリーさん御苦勞様でしたわね』

『では旦那、お先へ失禮いたします』

『今晚は。美人が居ますか……』

『はい二階に澤山居りますから……』

『ほう……居るね、素晴らしい肉體をした美人……らしいのが、四人か。』

『あら、いらつしやいらくししややい』

『何だ一齊にしやべるから判らないぢやあないか……だがどぎつい化粧をしたものだね、まるで玉の井、龜井戸の極悪を見るやうぢやないか。』

『何あに紳士、タマイーつて何のこと？』

『うう、それはスペインの好いことの言葉だよ』

『ぢやカムメードはなんですか？あゝきつとカメラードのこと？ でせう』

『あはゝゝゝそれかね、それはガムボチャの土人の御祈禱の結び句だよ』

『まあ、紳士はすい分廣く世界を知つてゐるのね、それで、私達の誰と遊んでくれますか？』

『さあ 誰にしようかね……いづれをあやめかきつばた、いづれもあかべなきつらだ、いづれはあぶねえかさつらだ』

『まあ何を云つてるのさ、紳士は語學がお達者ね。』

『あはゝゝゝ紳士はこゝがお達者だ。』

『ねえ、誰かを定めて頂戴』

『はい、たゞかと聞いて頂戴』

『冗談ぢやないわ』

『油断はないよ……だが、實は私はたゞ一人の女の人の所へ来たかつたのだから』

どうも誰かをこの中から一人選ぶといふのは困るね』

『左様ですか』

『だから今夜はたゞ見學だけにしてをいてまた明晩來ることとするから、ね』

『ではまたぜひ来て下さい』

『ぢや左様なら』

『またお出でなさい、ね』

『左様なら』

ベニスベニスの街の夜は更けて、ゴンドラゴンドラの水棹水棹の音が暗い水面を迂つて行く、旅する異那人の郷愁を咬るかすかな樂の音が漂ふて、何處かで扉締り扉締りをした物音が大きく夜空に響いた——と氣取つて云ふと、この場の光景光景が斯うもあらう。

ピヤ・サン・ピエトロの響き

ピヤ・サン・ピエトロ。美しい響の地名だが、そのまたピヤ・サン・ピエトロが女の稼ぎに出る盛り場なのだから、猶更もつて美しい譯だ。

伊太利はミラノのヴィクトル、エマニエルとてミラノの銀座と呼ばれる通りにデパートメントストアアシエンテがあるが、そこから少し行つた處がこの銀線を振り搖る如うな響を持つたピヤ・サン・ピエトロで、街の美姫の活躍場なのである。

このミラノの商賣女達は白人であらうと、有色人であらうと一切頓着なしに容にするといふのだが、果してどうだらう……と私は思ひながら、ぼんやりとシヨウウキンドウを眺めてゐた。

土産物のそろ／＼品定めかといふのですか、處がさうでないので。

そら、私の横へ女が一人立止つて、同じ様にウキンドウを眺めはじめた。

これが商賣女かどうかを試すには……今に女が此方を向いたら笑つてみせればいゝ。若し商賣女なら相手も笑つて應ずるから、そしたら明白になる。

やはりこの女は商賣女だつた。

『どうだね、面白いことがあるかね』

と私は笑顔で近寄つて来る女に話かけたのだ。處が情なや、この女は英語がほんの少ししか話せない。

『ホテルへ行きませう』

と頻りにそれを繰返す。だが、その外の事はどうも不明瞭で解り兼ねる。だが、伊太利語は、私の日本語と同様に素敵に話せるらしい。が残念乍らこれは此方が駄目だ。

『駄目だね、言葉がこんなに解らんでは、面白くないからね』

と私はぶら／＼歩き乍ら云ふと、女は熱心の度を更に高める。

『大丈夫です！ 英語や獨逸語や佛蘭西語なんかは知らなくとも大丈夫です。それにいよ／＼となれば、こゝに辭書があるからね、行きませうホテルへ行きませう』と益々ホテル行を進める。

伊英と、伊佛の辭書をバケツから覗かせて、その上を掌でとんとんと叩いてみせ